食がつくる国語教育の方法

法政大学中学高等学校
林　圭介
他１名

１．はじめに

本研究のテーマは、食がつくる国語教育とは何か、である。国語教育と実社会の関係を浮かび上がらせることをねらいとして、食から国語教育をつくる教育の方法とその具体的な実践を提起したい。

食に着目するのは、第一にコロナ禍による日常生活の大きな変化が挙げられる。マスクの着用に見られるように、感染のリスクを低めるために、人と人との関係は近づくよりも遠ざかることが目指されるようになっている。食は人の体をつくり健康を維持するだけでなく、個と個の関係を日常的につくるものとしてある。学校生活でも食は交流や団らんの場から黙食を通じた孤食の場へと変化しつつある。

第二に社会における国語教育が置かれた位置づけが挙げられる。「戦後最大の改革」と形容される今日の教育改革において問題となっているのは、高校国語における文学と現実の関係である。高校国語から文学が消えるというニュースは、昨今の教育改革と国語教育の関係を如実に表しているだろう[1]。

国語教育で扱う文学に着目しよう。たしかに文学は読むものであり、「食べるもの」ではない。だから、文学に描かれた食は、日常の生活や現実の社会と直接には結びつかない。しかし、文学は「食べること」を表現する[2]。この「食べること」をめぐる表現が文学を個人の生活や現実の社会を考えるための生きた教材に変える。

本研究の意義は、食を通じて日常の生活や現実の社会に広がる問題を見つめ、ことばと現実がいかに切り結ぶかを国語教育において明らかにするところにある。日常の生活と結びついた食に着目することで、文学を現実とかけ離れた表現ではなく現実に根ざした表現として捉えなおし、国語教育における文学の学び方を具体化したい。またこの食を通じた文学教育から他教科や異文化といった国語教育の「外」へとつながる教育の方法を素描したい。

本研究で試みた３つの教育実践は、１）高校２・３年生を対象とする必修選択科目である言語表現法ゼミにおける食と文学をテーマとする「食からつくる文学教育」、２）夏期・冬期に行う特別講座、高３三学期に行う三学期講座における他教科と共同で食を考える「他教科とつくる食の教育」、３）ゼミと特別講座、三学期講座を通じた異文化における食を語り合う「異文化とつくる食の教育」である。この食がつくる国語教育における３つの教育実践を通じて、それぞれの学習者がいかに自分と社会のつながりを

---

[1] AERA 編集部は、「2022 年度から実施される高校国語の新学習指導要領で、「実用文」を扱う比重が増え「文学」の扱いが大幅に減少する」点を指して、「国語が、戦後最大といわれる変化を前に大きく揺れている」と報じている（『AERA』、朝日新聞出版、2020 年 1 月 13 日号、56 頁）。

[2] 藤原辰史は、「食べるもの」によって規定された「宗教的〈食の共同体〉」ではなく「「食べること」を基軸につながる可能性」を探る必要を論じている（池上甲一、岩崎正弥、原山浩介、藤原辰史編『食の共同体　動員から連帯へ』ナカニシヤ出版、2008 年、6 頁）。引用文中の傍点は原文のママ。以下同様。

身につけ、社会的現実に開かれた国語教育を学んだのかを明らかにしたい。

２．食からつくる文学教育

２−１．言語表現法ゼミ

「食からつくる文学教育」の実践を行ったのは、言語表現法ゼミである。言語表現法ゼミは、本校における必修選択科目の一つで、高２・高３の２つの学年が選択することのできる合同ゼミである。2022年度のゼミでは高２の選択者はおらず、高３の９名で展開した。

【資料１】の「学習予定表」に挙げたように、「今年度のゼミの目標は、日常の生活と社会とのつながりを関連づけることができるようにするために、文学・映画・音楽などに描かれた“食”を軸にして言語表現の意味を考えること」である。この目標を掲げた背景には、昨今の教育改革とコロナ禍が挙げられる。

紅野謙介によれば、学習指導要領の改訂を通じた「戦後最大の改革」というオーバーな形容は、大学教育、入試、高校教育の「三位一体の改革」として計画されているためである[3]。従来の「教材読解型の授業中心のあり方を批判するときに、必ずセットになって持ち出されるのが、大学の授業」だとして、「文学部の授業」が「標的」にされているという[4]。そのために、高校国語から文学が消える恐れがある。たとえば、高２、高３における「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」の選択では、大学入試との関連で「文学国語」「国語表現」を選択しにくい状況がある。ここには、文学と教育をめぐる関係のむずかしさが表われている。

また国語教育における改革の混迷と時期が重なるのは、コロナ禍である。コロナ禍によって消えつつあるのは、共に食べることの経験だ。たしかに１人で食べる個食は、必ずしも孤独を意味しない[5]。しかし、コロナ禍は、たとえば互いのスペースをパーテーションで区切るように個食を制度化し、食を通じた共同体の意味を変えつつある。共食から孤食への変化は、日常の生活から他者との関わりが切り離されていく現実を映し出している。

その意味で、日常の生活と結びついた食から文学を読むことは、人々の現実を浮かび上がらせる実践として捉えなおすことができる。そこで、近現代の日本文学のテクストとその歴史的変遷を対象として、食から文学を読む授業を考えたのである。

2022年度の言語表現法ゼミで一学期中間・期末と二学期中間・期末でテーマにしたのは、「“果物”の味」、「“空腹”の味」、「“満腹”の味」そして生徒自らの興味・関心に惹きつけたテーマを選び発表することである。ゼミで中心的に扱ったのは、インターネットサイト『青空文庫』および国語教科書に収められた近現代の日本文学のテクストである。ドミニク・チェンは、インターネットにおける他者によっ

---

[3] 『国語教育 混迷する改革』筑摩書房、2020年、7〜8頁。
[4] 前掲、131〜132頁。
[5] 個食と孤食のちがいについては、「（食の向こうに　世界を味わう）食べることは、孤独じゃない　松重豊さん、藤原辰史さん」（『朝日新聞』2021年１月１日）を参照されたい。『孤独のグルメ』で主人公を演じる松重豊は、個食を「あえて一人で食べることを選ぶ「独食」」として、「周りに直接的な縁を求めなくても、「給仕してくれるおばちゃんの言葉があったかい」と感じるとか、世界が広がっていく可能性がある」と意味づけている。

て自由に活用される状態で開示されることを「オープンソース」と呼ぶとして、文芸がもともとこのオープンソースであったと指摘し、「文学に対する認識を、「読み込み専用」型から「読み書き」型へと更新」することを提案している[6]。ドミニクにならって言語表現法ゼミでは、食から読む「文学」を教えるための方法を提起する。それが「“果物”の味」、「“空腹”の味」、「“満腹”の味」という3つのテーマから生徒による発表へという流れで食から文学教育をつくる意味である。

２−２「“果物”の味」

２−２−１．芥川龍之介と福山雅治

まず「“果物”の味」では、芥川龍之介『蜜柑』(1919年)、梶井基次郎『檸檬』(1925年）を通読して、2〜3人組で4つのグループに分かれて１）要約、２）疑問、３）コメントの項目ごとに発表するという形式で授業を進めた。2回にわたるこの授業の後、3回目にまとめを行った。

『蜜柑』のあらすじから確認しよう[7]。『蜜柑』は、憂鬱な気分に耽っている主人公が乗る列車の一等席に汚れた小娘が入ってきて、人目も気にせずトンネルを潜る列車の窓を開け、その外に蜜柑を放り投げるという物語である。先行研究では、この放り投げられた蜜柑の意味をめぐって論じられてきた[8]。

『蜜柑』を通読した後に行った、ゼミ内のグループ討議から見えてきたのは、１）蜜柑が姉弟の絆や愛を表すものであることである。この見方は、窓の外に放り出されただけの蜜柑になぜ「私」が感動するのかという疑問と結びつく。また、２）「私」が「小娘」にさまざまな感想＝「色」を加えていることである。少女に着目して小説を読めば、彼女が故郷に別れを告げる物語であり、少女の態度はまるで変わっていない。つまり、「色」は「私」の勝手なひとりよがりな変化を表している。さらに、３）冬の寒空や悲しげな子犬と蜜柑の色が対比されるという表現の特色に、4）大正期においてはまだ「奉公」といった児童労働の実態があったこと、が挙げられた。

『蜜柑』に描かれた果物は、語り手の「私」が作り出したい理想の世界を表しているとまとめられる。その証拠に「私」は、本当に「小娘」が奉公に出たのかを確認するどころか、彼女に話しかけてもいない。もし主人公の「私」が女性であったなら、彼女を「小娘」と呼び、児童労働に赴く彼女をまったく助けないということはありえただろうか。窓の外に放り投げられた蜜柑は、誰も食べてはいない。その意味で、蜜柑に味はない。この味のない蜜柑は、自分の憂鬱を晴らすためだけの「私」の小道具であり、自分で勝手に甘酸っぱい色をつけた「私」だけの理想なのだ。甘くも酸っぱくもない蜜柑が作る他者のいない世界。『蜜柑』における「私」の感動は、「小娘」から見れば、まったく違う「味」をしているのかもしれない。

この芥川の小説と組み合わせて、音楽の歌詞と読み比べた。「「ことば」を聴く」として、取り上げ

---

[6] 『コモンズとしての日本近代文学』イーストプレス、2021年、9頁。
[7] 芥川龍之介『蜜柑』、『青空文庫』https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/98_15272.html、2023年1月20日アクセス。
[8] 芥川の『蜜柑』の先行研究については、友田義行「芥川龍之介「蜜柑」試論——メタフィクションへの接近——」が詳細に論じている（『信大国語教育』第28号、2018年、15〜26頁)。

た音楽は福山雅治『夏蜜柑色の夏休み』（2001 年）である[9]。福山の佳曲は、「8 時 6 分発ヂーセル汽車に乗って蜜柑のおばあちゃんの笑顔に逢いにゆこう」と始まる。電車に乗る主人公が相手を思うという点で、芥川『蜜柑』と似た世界を描いている。しかし、主人公が憂鬱を抱える青年ではなく快活な少年であり、語りかけ（ようと考え）る相手がいるために、小説と音楽ではまったく異なる物語となる。この少年という主人公の設定と祖母という語りかける存在が福山の音楽と芥川の小説の違いである。

「夏の冒険」における蜜柑と、放り投げられた冬の蜜柑。芸術のジャンルを置き換えることでわかるのは、主人公の形象が道具立てとしての蜜柑に違いをもたらすことである。

２−２−２．梶井基次郎とマカロニえんぴつ

次に扱ったのは『檸檬』である。作者の梶井基次郎は、32 歳で夭折した大正期を代表する詩人にして小説家で、『檸檬』は彼のデビュー作である。略年譜をひもとくと、この作が書かれたのは東京帝国大学文学部英文学科に入学した翌年で、梶井が 23 歳の頃である。すぐに気づくのは、主人公の「私」が「宿酔」や「借金」を背負い、学校へ行く「友達」がいなくなり、1 人取り残されて「憂鬱」になる作者自身に似ていることである。のちに結核で亡くなる梶井の未来を予言しているようにもみえる。芥川の『蜜柑』と読み比べれば、大正期の主人公にとって「憂鬱」は、文学青年にとっての流行病だったこともわかるだろう。しかしながら、小説は作者の影を残しつつ、その舞台が東京ではなく「京都」に置き換えられているという点で、『檸檬』は現実の出来事を言葉で表現したフィクションである[10]。

『檸檬』は、主人公が鬱屈した気分を果物である檸檬を通じて紛らしていくという物語だ[11]。生徒がこの小説に読んだのは、想像の世界で社会と折り合いをつけていく主人公の姿だった。また、主人公は檸檬を食べていない一方で、食べることができないはずの「びいどろ」に「かすかな爽やかな」「味」を感じ、また黄色という色を檸檬だけでなく生活が蝕まれる前の「オードコロン」でも表しているというコメントが挙げられた。『檸檬』でもこの黄色い果実が口にされておらず、檸檬の色や形に感嘆しつつも他の物にもこの色や形の美しさが見出されている、というわけだ。生徒はこう問うているのだ。なぜ小説は「檸檬」を必要としたのか、と。

この生徒の問いに答えるために、先に読んだ『蜜柑』と読み比べてみたい。『蜜柑』は「小娘」が列車の窓の外へと蜜柑を放り投げる非常識な行動と同じく、丸善の本棚から「画本」を取り出して散らかした挙げ句に、「檸檬」を置いてそのまま外へ出るという非常識な行動という点で重なり合う。前者で「私」が感動しているのは、「蜜柑」が弟たちへの彼女なりの別れだったからだ。一方、後者で「私」の気分が紛れる姿は、『蜜柑』の主人公と同じく、過去の「私」に対する「私」なりの別れを意味していると読むことができる。

---

[9] 『f』（ユニヴァーサルミュージック、2001 年）に収録。

[10] 日比嘉高は、『檸檬』の末尾の一文に着目して、主人公の「青年の身体と空間が生きた京都の街」について論じている（『文学の歴史をどう書き直すのか――二〇世紀日本の小説・空間・メディア』笠間書院、2016 年、22 頁）。また日本の近現代文学を「フィクション論」から総括的に論じたものとして、高橋幸平、久保昭博、日高佳紀編『小説のフィクショナリティ　理論で読み直す日本の文学』（ひつじ書房、2022 年）が挙げられる。

[11] 本文の引用は、梶井基次郎『檸檬』による（東郷克美他編『高等学校　改訂版　現代文Ｂ』第一学習社、2019 年）。

もちろん、「檸檬」を「画本」に置くことで丸善の「大爆発」を想像する「私」の姿は、まるで現代のテロリストのようだ。しかし、このテロリストが壊すのは、現実の丸善ではなく、憂鬱を抱えた自分である。丸善の爆発を夢想することで憂鬱な気分を破壊し、芸術家としての自分の新たな出発を意味しているのだ。このように、他者の行為や過去の自分といった対象を仮構することで自己を「芸術家」として表象する主人公が描かれているのである。

『檸檬』と合わせて取り上げた音楽は、マカロニえんぴつ『レモンパイ』（2020 年）である[12]。この食べ物ソングで歌われているのは、歌詞で三度繰り返される「レモンパイ」に象徴される恋の不安である。生徒から挙がったコメントで興味深いのは、「レモンパイ」が何かがわからなかったことである。「レモンパイ」を食べたことがないのだという。「アップルパイ」は有名だが、「レモンパイ」はややマイナーであるようだ。しかし食べたことがないにもかかわらず、聴き応えがあったのは「レモンパイ」と恋愛の組み合わせのためだ。たしかにレモンは直接かじって食べることがほとんどない。しかし、甘いパイに取り入れられれば、酸っぱいレモンは甘くなる。どんなにつらいことも、いつか自分を作る糧となるのだ。『レモンパイ』は、恋にたとえて人生の意味を歌っているようだ。

２−２−３．漱石の「蜜柑」

日本の近現代文学に描かれてきた「私」たちと果物はどのように関係づけられるのか。この関係を考えるために、まとめの授業では夏目漱石『三四郎』（1908 年）と村上春樹『納屋を焼く』（1983 年）を取り上げ、2 つの小説に描かれた果物の意味を比較した。またこの比較を浮かび上がらせるために、J ポップの 2 つの歌詞からスピッツ『ミカンズのテーマ』（2002 年）と CHAI『ぎゃらんぶー』（2017 年）を扱った。時間をおよそ 80 年またぎ、また文学から音楽へと表現のジャンルを越えて考えることでわかったのは、「蜜柑」の「味」を利用した表現と、「味」とは関係がない「蜜柑」というありふれた果物を活用した表現があることだ。

『三四郎』は田舎者の主人公が大学に通うために熊本から東京へ上京し、東京のめまぐるしい文化に憧れつつ、そこで出会った美禰子に魅かれるという物語である。着目したのは、当時、『朝日新聞』に掲載された際に本文に付けられた挿絵である。図 1 の「（第百十三回）十二の四」には床に伏す男をもう 1 人の男が看病し、図 2 の「（第百十四回）十二の五」には男に代わって女が看病しており、そばにカゴが置かれている。図 3 の「（第百十五回）十二の六」には教会に向かって学帽を被った男が早足で向かっており、図 4 の「（第百十六回）十二の七」では学帽の男が晴れやかな女に語りかけている。

---

[12] 『hope』（TALTO、2020 年）に収録。

図１

図２

図３

図４

生徒に予測してもらったのは、１）この挿絵から連想できるのはどのような物語か、２）カゴに入った果物にはどのような意味を読むことができるか、である。予測を立てた後、一連の挿絵と対応する本文を読み、挿絵と物語の関係とおよび果物が物語で果たす役割を考察した。

本文に描かれていることを確認しよう。

よし子は風呂敷包の中から、蜜柑の籠を出した。

「美禰子さんの御注意があったから買ってきました」と正直な事を言う。どっちのお見舞だかわからない。三四郎はよし子に対して礼を述べておいた。

「美禰子さんもあがるはずですが、このごろ少し忙しいものですから――どうぞよろしくって……」

「何か特別に忙しいことができたのですか」

「ええ。できたの」と言った。大きな黒い目が、枕についた三四郎の顔の上に落ちている。三四郎は下から、よし子の青白い額を見上げた。はじめてこの女に病院で会った昔を思い出した。今でもものうげに見える。同時に快活である。頼りになるべきすべての慰謝を三四郎の枕の上にもたらしてきた。

「蜜柑をむいてあげましょうか」

女は青い葉の間から、果物を取り出した。渇いた人は、香かにほとばしる甘い露を、したたかに飲んだ。

「おいしいでしょう。美禰子さんのお見舞よ」[13]

図２の挿絵に描かれた女は、三四郎の大学の先輩である野々宮の妹よし子である。三四郎がインフルエンザで床に伏していると聞き、三四郎の看病に訪れたのである。よし子が手に持つ土産は「特別に忙しいことができた」という美禰子が「お見舞い」として頼んだもので、それは「蜜柑」だった。この後、「特別に忙しいこと」の内容が明らかになる。美禰子は、よし子が結婚するはずだった相手と結婚することになったというのである。

先に触れた一連の挿絵が表しているのは、三四郎の友人与次郎が病に倒れる三四郎を訪れ、その与次郎が重い病にかかったと嘘をついて美禰子とよし子に見舞いに行くよう促したものの、尋ねたのはよし

[13] 夏目漱石『三四郎』、『青空文庫』https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794_14946.html、2023 年 1 月 20 日アクセス。

子１人だった。そのよし子から、美禰子が見舞いに来られない理由が美禰子の結婚のためだと聞き、回復した三四郎が慌てて美禰子のもとを訪れるという展開を表しているのである。「おいしいでしょう」とよし子から差し出された「蜜柑」が意味するのは、おいしくはない三四郎の恋の行方である。果物としての「蜜柑」は、美禰子に思いを寄せていた三四郎の恋が叶わない苦みを読者に伝えるのだ。

２−２−４．春樹の「蜜柑」

「蜜柑」の皮をむいて果物を味わう漱石の『三四郎』に対して、「蜜柑」の皮をむいても果物を味わわないのが春樹の『納屋を焼く』である。あらすじを確認しよう。登場人物は「僕」と彼女、彼の３人である。小説家の「僕」は、パーティーで知り合った彼女と懇意になるが、彼女はアフリカへ旅し、そこで出会った彼と恋仲になり、2 人で帰国する。「僕」の家にやってきた 2 人は、酒を飲んで大麻を吸う。すると、先に眠ってしまった女をよそに、彼は唐突に語り始める。「時々納屋を焼くんです」と。しかし、焼くと言っていた納屋の代わりに消えたのは、彼女だった。

この小説の冒頭部分で、「蜜柑」は次のように語られている。

「蜜柑むき」の話をしよう。

最初に知り合った時、彼女は僕にパントマイムの勉強をしているの、と言った。

へえ、と僕は言った。たいしてびっくりもしなかった。最近の若い女の子はみんな何かをやっている。それに彼女は何かに真剣に打ち込んで才能を磨いていくといったタイプには見えなかった。

それから彼女は「蜜柑むき」をやった。「蜜柑むき」というのは文字どおり蜜柑をむくわけである。彼女の左側に蜜柑が山もりいっぱい入ったガラスの鉢があり、右側に皮を入れる鉢がある――という設定である――本当は何もない。

彼女はその想像上の蜜柑をひとつ手にとって、ゆっくりと皮をむき、ひと粒ずつ口にふくんでかすをはきだし、ひとつぶんを食べ終えるとかすをまとめて皮でくるんで右手の鉢に入れる。その動作を延々と繰り返すわけである。言葉で説明すると、これはべつにたいしたことではない。しかし実際に目の前で十分も二十分もそれを眺めていると――僕と彼女はバーのカウンターで世間話をしていて、彼女は話しながら殆んど無意識にその「蜜柑むき」をつづけていた――だんだん僕のまわりから現実感が吸い取られていくような気がしてくるのだ。これはすごく変な気持だ。

昔アイヒマンがイスラエルの法廷で裁判にかけられた時、密室にとじこめて少しずつ空気を抜いていく刑がふさわしいと言われたことがある。どんな死に方をするのか、くわしいことはよくわからないけれど、僕はふとそのことを思い出した。[14]

「僕」が彼女の「蜜柑むき」に見出すのは、現実感のゆがみである。「蜜柑むき」という「設定」はある。しかし、「本当は何もない」。「蜜柑むき」の「パントマイム」から「僕」が思い出すのは、実際

[14] 村上春樹『納屋を焼く』、『村上春樹全作品 1979〜1989③ 短篇集Ⅰ』講談社、1990 年、238〜239 頁。

には行われなかった、ホロコーストを実行した「アイヒマン」に対する刑罰である。あり得べき刑罰という「設定」はある。しかし「本当は何もない」というわけだ。

この「蜜柑むき」について、彼女は言う。「「あら、こんなの簡単よ。才能でもなんでもないのよ。要するにね、そこに蜜柑があると思いこむんじゃなくて、そこに蜜柑がないことを忘れればいいのよ。それだけ」」と[15]。「あると思いこむ」のではなく、「ないことを忘れればいい」という「蜜柑むき」の極意は、まさにこの小説における彼女の行方と重なる。彼女がいると思い込むのではなく、いないことを忘れればいいというように。「納屋を焼く」という事実があると思い込むのではなく、その事実がないことを忘れればいいというわけだ。『納屋を焼く』という小説は、彼女の言葉がそのまま物語の展開と重ねられているのである。

２−２−５．スピッツと CHAI へ

２つの小説における「蜜柑」の意味は、合わせて聴いた２つの音楽における「蜜柑」の位置づけと対応する。SPITZ の『ミカンズのテーマ』における「蜜柑」は、甘くて酸っぱい「恋」にうってつけの果物として歌われている[16]。しかし、CHAI の『ぎゃらんぶー』は、『納屋を焼く』と同様に、もはや甘酸っぱい味と内容にはまったく関係がない[17]。『納屋を焼く』で主人公が親しくなる彼女は、恋愛というよりも存在が消えてなくなる謎と重なる。『ぎゃらんぶー』で歌われている「みかん」も、小説で消える納屋、彼女、「アイヒマン」の刑と同様に、「カン」でつながる音の連なりとして表現されているのである。

このことは、芸術というジャンルにおいては果物の表現が、果実を食べたり味わったりするという現実の意味と異なっていることを表すだろう。「蜜柑」という表現に着目することでわかるのは、文学において果物は現実の社会的意味を変化させることである。

２−２−６．高村光太郎と米津玄師、あるいは伊坂幸太郎

「蜜柑」の文学に続いてまとめたのは、「檸檬」の文学である。取り上げたのは、先にも扱った梶井基次郎『檸檬』と高村光太郎『レモン哀歌』（1938 年）である。２つの作品は、詩と小説でジャンルが異なるが、表現の水準において重ねて読むことができる。というのも、いずれもこの果物がある物の上に置かれることで意味づけられているからだ。一方は「画本」に、もう一方は「写真の前に挿した桜の花かげ」に[18]。前者が自分の「憂鬱」な気分を紛らす「爆弾」であったのに対し、後者は亡くなった妻が最後に食べた食事である。「檸檬」は忘れられない時を記憶するための果物であるのだ。

これら「檸檬」の文学と、米津玄師『Lemon』（2020 年）の歌詞を比べた[19]。比較から浮かび上がるのは、「Lemon」が「胸に残り離れない」人物の記憶をとどめる果物であることだ。米津の歌は「檸檬」の

---

[15] 前掲、239 頁。
[16] 『三日月ロック』（ユニヴァーサルミュージック、2002 年）に収録。
[17] 『PINK』（ソニー・ミュージックエンタテインメント、2017 年）に収録。
[18] 高村光太郎『智恵子抄』、『青空文庫』https://www.aozora.gr.jp/cards/001168/files/46669_25695.html、2023 年 1 月 20 日アクセス。
[19] 『STRAY SHEEP』（ソニー・ミュージックエンタテインメント、2020 年）に収録。

文学の味を正確に繰り返している。音楽で表現された果物もまた、文学における果物の味、しかもほとんど食べられることがないにもかかわらず、その味が表現として追求されているのだ。

この「蜜柑」と「檸檬」のゆくえは、伊坂幸太郎の長編『マリアビートル』（2010 年）に見出すことができる[20]。『マリアビートル』は、「王子」と呼ばれる中学生によって子供を人質に取られた元・殺し屋の木村と、盛岡の有力者峰岸のさらわれた息子を奪還した「蜜柑」と「檸檬」という殺し屋たちが新幹線内で繰り広げる推理小説である。『Bullet Train』（2022 年）は、この小説の映画版として知られる話題作でもある[21]。興味深いのは、「蜜柑」と「檸檬」が本作では殺し屋として登場していることだ。

文学作品のタイトルがそのまま推理小説の人物の名前で表現されていることには、これら果物が果物の味というよりも文学の表現として、すなわち文学の味として描かれていることを意味しているだろう。「蜜柑」を放り投げた少女の姿から自分の憂鬱を紛らした『蜜柑』と、「檸檬」を「爆弾」にして自分の憂鬱を紛らした『檸檬』の主人公は、およそ 100 年の時を経て新幹線で殺し屋となって蘇っている。彼らの憂鬱は、取り戻したはずの有力者の息子が亡くなってしまい、お金の入ったアタッシュケースまでなくなってしまうという形で再現されている。憂鬱を紛らせた果物の味は、文学の味として表現されているのである。

２−３．「“空腹”の味」

２−３−１．カフカの〈変身〉

「“果物”の味」の次に取り組んだのが「“空腹”の味」である。日本の近現代文学に描かれた果物では、食べて味わうことと食べずに味わうことの 2 つが表現として描かれてきた。この食べずに味わうことの極限にあるのは空腹だろう。空腹を味わうことはできるか。題して、「“空腹”の味」である。「“空腹”の味」で扱ったのは、フランツ・カフカ『変身』（1915 年）、村上春樹『恋するザムザ』（2013 年）、宮沢賢治『よだかの星』（1934 年）である。

日本の近現代文学に加えて、世界文学として知られ、国語教科書にも収められている『変身』を取り上げたのは、この小説が空腹の意味を問う小説であるからだ[22]。扱ったのは、『変身』の「第一章」で、近年、話題を呼んだ多和田葉子訳である[23]。

あらすじから確認しよう。ある朝、目覚めたらグレゴール・ザムザは「ばけもの」になっていた。しかし、ザムザは、変身によって変わり果てたことよりも「セールスマン」としていつもの仕事に向かわなければと焦っている。一方、家族と支配人は手のひらを返したように、彼から遠ざかっていく。

生徒の議論から挙げられたのは、「人間の本性」や「人間のもろさ」である。変身した主人公を見つ

---

[20] 伊坂幸太郎『マリアビートル』角川書店、2010 年。

[21] HP「KADOKAWA」は、同名の映画の劇場公開に伴って、期間限定で小説の本文 200 頁を試し読みで公開した（https://www.kadokawa.co.jp/topics/7366、2023 年 1 月 20 日アクセス。）。

[22] 言語表現法ゼミでは、例年、神戸女学院大学が行う翻訳コンクールに投稿を行い、英語から日本語への翻訳に取り組んでいる。この翻訳の実践に加え、今年度は、韓国の高校との交流活動を組み込むこととした。そこで、日本語に翻訳されたテクストを読む意味についても考えた。原語で読むか、翻訳で読むか。この問いは、原語でどこまで深く読み込むことができるかだけでなく、翻訳でどこまで遠く読み広げることができるかという問いと置き換えることができる。この韓国との交流活動については、「４．異文化とつくる食の教育」で触れる。

[23] フランツ・カフカ『変身』多和田葉子訳、多和田葉子編『ポケットマスターピース 01 カフカ』集英社、2015 年。

める他人の目の変化こそ、変身というテーマの意味だというわけである。また変身してしまった理由が自分ではわからないのも、この小説の特徴として挙げられた。ある日、事故や病気で体が動かなくなってしまうことは、現実にも起こりえる。しかもその理由は、どんなに追及してもわからない。その意味で、この小説は自己と他者の関係の危うさを寓意的に描いた物語として捉えることができる。

授業では、多和田葉子の翻訳に着目した。多和田の訳が特徴的であるのは、従来の日本語訳で「虫」「甲虫」「害虫」などと訳されてきた“Ungeziefer”を「ばけもののようなウンゲツィーファー」とドイツ語の音声を再現する形で訳し、この語に（　）で説明を加えた点にある[24]。また、多和田訳では、従来、“Ungeziefer”に用いられてきた訳語である「害虫」という表現を、ザムザが仕事で向かう出張を回想する場面に用い、ザムザの「出張先でのストレス」として説明している[25]。『変身』というタイトルも従来の「へんしん」ではなく「かわりみ」とルビを振り、ザムザがどんな虫になったかではなくザムザの身体の変化を小説のテーマとして表現している。

人間から得体の知れない「ばけもの」に変身しても、空腹は変わらない。家族からザムザに差し出される「ミルク」は、身体の変身に伴ってさえ変わることのない空腹の意味を表している[26]。変身したザムザはどうなるのか。『変身』を読んだことのある生徒が語ったのは、父親の投げたリンゴが背中に刺さり、ザムザは結局死んでしまうという結末である。そこで、授業ではザムザの死という『変身』の「後日談」について考えることとした。それが村上春樹『恋するザムザ』を取り上げた理由である。村上によれば、『恋するザムザ』は、カフカ『変身』の「後日譚」として書かれたという[27]。授業では、この「後日談」と原作の関係について議論した。

２−３−２．春樹の〈変身〉

『恋するザムザ』が描くのは、虫になったザムザが人間になる変身である。朝、目覚めて空腹を感じたザムザは階段を降り、テーブルに置かれた食事を平らげる。その後、鳥に襲われるかもしれないという恐怖から再び階段を上がって部屋にあったガウンをまとう。そこへ壊れた鍵を修理する依頼を受けた鍵屋の娘が訪ねてくる。その彼女にザムザが惹かれていく。

はじめ人間の身体に戸惑っていたザムザは、次第に人間の世界を知りたいと思うようになる。身体の変身が心の変化と対応するのは、謎である。人間よりも「魚」や「ひまわり」でありたいと思っていたザムザに変化を与えるのは、鍵屋の娘の謎なのだ[28]。

興味深いのは、『恋するザムザ』でザムザが以前に何であったのかは説明されていないことだ。鳥に怯える様子などから原作のようにザムザが虫だったのではないかと想像させるものの、実は、何であっ

---

[24] 前掲、9 頁。

[25] 「あけても暮れても旅旅旅。出張先でのストレスが会社での本来の仕事をはるかに上まわっている。旅が害虫の群れみたいに襲いかかってくる」と、グレゴールは語っている（前掲、10 頁）。

[26] 第二章の冒頭部分で語られているのは、グレゴールの「空腹」である。「扉のところまで来て初めて気がついたのは、自分がある匂いにひきよせられてそこに来たということだった。食べられるもののにおい。甘いミルクが猫の餌入れに注いであり、細かくちぎった白いパンが浮いている。嬉しくて笑い出しそうになった」のである（前掲、32 頁）。

[27] 村上春樹『恋しくて――TEN SELECTED LOVE STORIES』中央公論新社、2013 年、365 頁

[28] 前掲、363 頁。

たのかは一言も書かれていない。逆に、虫と明確に書かれているのは、ザムザではなく、人間である鍵屋の娘、すなわち「せむしの女」である。『恋するザムザ』は、人間から虫になる変身ではなく、人間であり虫でもあるという変身しきれない者たちを描いているのだ。

その意味で、虫の意味をどれだけ原文に忠実に訳すかに苦心してきたカフカ『変身』のこれまでの翻訳と比べると、村上の『恋するザムザ』は、原文とは異なる解釈を与えている。また『恋するザムザ』が描く「世界」は、カフカの生きた戦時下のチェコあるいは近未来の戦争を思わせる設定となっている。カフカの生きた現実や、カフカの描いた「世界」を文字通りの「後日談」として置き換えるのではなく、『変身』とは異なる主題と設定を通じて、半分人間で半分虫の状態に置かれた極限状況において、人はどのように生きていくことができるかを読者に問うているのである[29]。

２−３−３．動物の変身

虫への変身と人間への変身から、人間の変身をめぐる物語について考察してきた。そこで、次に取り上げるのは、人間ではなく動物の変身をめぐる物語である。

宮沢賢治『よだかの星』は、みにくいとされる鳥が、星になる物語である[30]。よだかはみにくい鳥だとされて、同じ鳥たちから悪口を言われ、鷹には名前を変えるようにおどされる。口に入った羽虫やかぶと虫を殺しているのは自分だと思ったよだかは、空の向こうに行ってしまおうと考えるようになる。しかし、お日さまも夜空の星々も相手にしない。星になるには、「相応の身分」と「金」がいるというのだ。よだかは空を「のぼっているのか、さかさになっているのか」もわからなくなるが、その体が火のように燃え、「今でもまだ燃えてい」る星になる。

なぜよだかは星に変身したのか。まず確認したのは、よだかが「実にみにくい鳥です」とされている理由である。本文には「顔は、ところどころ、味噌をつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳まで裂けています」と語られ、他の鳥たちも「口の大きい」様子を「きっと、かえるの親類か何かなんだよ」として、鳥ではなく両生類と意味づけてさげすんで呼んでいる。挙句に、鷹はよだかに言う。「おれがいい名を教えてやろう。市蔵というんだ。市蔵とな。いい名だろう」と。

鷹がよだかに「市蔵」と名づけるのは、同じ鷹と見なされたくないためである。また市場というお金が交換される場所で、そのお金を貯める蔵という場所を表す漢字を組み合わせた名前とすることで、自分は誰にも交換されない存在であるのに対し、よだかは誰とでも交換される対象として扱うためでもある。このような幾重にも貶められる関係に絡めとられながら、しかし、よだかが見出すのは自分という存在のあり方である。

食に着目すると、小説に登場する「食べもの」には常に食べる者と食べられる者が描かれていることがわかる。「蜂すずめは花の蜜をたべ、かわせみはお魚を食べ、夜だかは羽虫をとってたべる」。だから、「僕はもう虫をたべないで餓えて死のう」とよだかは考えるのである。よだかが星になろうと考え

---

[29] 詳しくは、拙論「世界文学の〈変身〉———村上春樹『恋するザムザ』論」（『JunCture』第 14 号、2023 年、110〜120 頁）を参照されたい。

[30] 宮沢賢治『よだかの星』、『青空文庫』https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/473_42318.html、2023 年 1 月 20 日アクセス。以下の引用は、『青空文庫』による。

たのは、鷹に殺される自分と、羽虫やかぶと虫を殺す自分は同じだと思ったからだ。「（ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ）」というわけだ。

星を目指して空を上っていくよだかについて、語り手は最後に次のように語っている。

これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか、上をむいているのかも、わかりませんでした。

ある星は、よだかに「星になるには、それ相応の身分でなくちゃいかん。又よほど金もいるのだ」と言っていた。しかし、よだかは星になるために空へ飛び上がっていたが、最後には上か下か、さかさかかもわからなかったと語られている。食べる者も食べられる者であったように、食はすべて社会とつながっている。よだかの死が表すのは、社会のつながりが上下の格差ではなく、左右の平等で結びついていることではないか。

「よだか」を取り入れたヨルシカの音楽『靴の花火』（2017 年）と比べよう[31]。『靴の花火』では、『よだかの星』の新たな読解の可能性を見出すことができる。それは物語にはない歌詞の中に描かれた「君」の存在のためである。「君を知ろうにもどっちつかず」の「僕はよだかにさえもなれやしない」。この言葉は、一見、後ろ向きに思える。しかし、「よだかにさえもなれやしない」とは、『よだかの星』におけるよだかの選択とは逆に、「僕」が「生きる」ことを選択したと読むことができる。「よだか」は「星」になったが、「僕」はよだかや「花火」のように高く打ち上るのではなく、「靴」で「花火」を消した。歌は、小説を別の角度から照らし出すことで、小説の意味を新たに描きなおすのである。

２−４．「“満腹”の味」

２−４−１．漱石の「ごちそう」

「“空腹”の味」に続くテーマとして取り上げたのは、「“満腹”の味」である。「空腹」は人がどんなものに変身しようと変わりなく感じるものであり、また食べることが食べられることを組み込む食物連鎖として捉えられる一方で、文学は「満腹」をどのように表現してきたのか。扱ったのは、夏目漱石『現代日本の開化』（1911 年）、村上春樹『パン屋を襲う』（2013 年）である。

まず『現代日本の開化』から考えよう。『現代日本の開化』は、明治 44 年に和歌山で一般の聴衆を相手に行われた講演である。教科書の教材にも収められた、ゼミでは初めて扱う評論教材である。

グループの発表で挙げられたのは、「日本の開化」が「内発的」ではなく「外発的」であり、「外発的」な「開化」が西洋からもたらされたものであることだ。重要なのは、この西洋からもたらされた力関係が覆すことのできない現実として認識されていることである。漱石はこの現実について、次のように「食」の比喩を用いて語っている。

---

[31] 『夏草が邪魔をする』（U&R records、2017 年）に収録。

ところが、日本の現代の開化を支配している波は西洋の潮流で、その波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が寄せるたびに、自分がその中で食客をして気兼ねをしているような気持ちになる。新しい波はとにかく、今し方ようやくの思いで脱却した古い波の特質やら真相やらもわきまえる暇のないうちに、もう捨てなければならなくなってしまった。食膳に向かって皿の数を味わい尽くすどころか、元来どんなごちそうが出たかはっきりと目に映じない前に、もう膳を引いて新しいのを並べられたと同じことであります。[32]

漱石によれば、「開化」とは「ごちそう」である。ところが、「開化」が「西洋の潮流」であるために、日本人は「食客をして気兼ねをしているような気持ち」になり「ごちそう」を味わうことができない。食という視点から読みなおせば、空腹とは異なる食の問題が浮かび上がる。それは「味」である。「食べるもの」はあるのに、「食べること」の醍醐味である味がないというわけだ。

興味深いのは、生徒の発表で、漱石の議論に対して、食べることができるのならまだマシだという意見が挙げられたことである。西洋からもたらされた「ごちそう」を完全に「味わい尽くす」ことはできなくても、半分でも味わえたなら幸せだというのだ。「内発的」に感じる人間の欲が、「外発的」に押し付けられた場合に、どうすることもできなくなって「神経衰弱」にならざるをえないと漱石は「結論」する。しかし、現代社会は明治末年の時代と異なる。味よりも食というわけだ。ここに漱石を相対的に捉える生徒の視点を読むことができる。

漱石の講演を踏まえ、取り上げたのが村上春樹『パン屋を襲う』である[33]。漱石の「結論」である、「内発的」に感じた欲が「外発的」に押し付けられたために病気になるという見方は、小説にあてはまるのか、そうでないのか。あるいは、別の見方があるのか。

２−４−２．春樹の「パン」

『パン屋を襲う』は 2 つの小説からなる。1 つは『パン屋を襲う』で、もう 1 つがその「後日談」の『パン屋を再び襲う』である。前者は「僕」と「相棒」が町のパン屋を襲いに行ったものの、ワグナー好きの主人からワグナーの音楽と引き換えにパンをただで食べることになる物語である。一方、後者は結婚した「僕」が再び空腹感に襲われ、妻と一緒にパン屋を再び襲い、かつて果たすことができなかったパン屋襲撃を再び試みるという物語だ。ただし、襲ったのはパン屋ではなく、マクドナルドだった。空腹が 2 人を襲ったのが深夜で、パン屋が開いていなかったのである。

前者の『パン屋を襲う』から確認しよう。この小説が『パン屋襲撃』というタイトルで、最初に『早稲田文学』に掲載されたのは 1981 年 10 月だった。小説には「神もマルクスもジョン・レノンも死んだ」とある[34]。ビートルズが解散して、はじめてのソロ・アルバムでジョン・レノンが歌ったのは神も仏もヒ

---

[32] 東郷克美他編『高等学校　改訂版　現代文Ｂ』第一学習社、2019 年、416 頁。
[33] 村上春樹『パン屋を襲う』新潮社、2012 年。
[34] 前掲、11 頁。

トラーも王様もビートルズも信じない、信じるのは自分とヨーコだけだという『God』で[35]、そのジョン・レノンが熱狂的なファンに銃で襲われ亡くなったのが 1980 年 12 月だった。村上はいち早くこのジョン・レノンの事件を小説の一節に取り込んだというわけだ。

また同名の映画では、小説と同じストーリー展開でありながら、新たに付け加えられた台詞やシーンがある[36]。たとえば、「打倒！民主主義」という言葉である。この言葉は、1970 年代のはじめに終息した学生運動で、学生が大学当局に向けて放ったスローガンだった。登場人物である学生風の 2 人が住むアパートに貼られたポスターは深作欣二監督の『仁義なき戦い』で、暴力団の抗争が社会を脅かす当時の社会状況を表している。さらに映画では最後のシーンで柱を殴りつけて悪ぶった主人公を、サングラスをかけた人物が注意すると「すみません」と謝るという、小説にはないシーンがある。このシーンは、2 人が「悪」に走ってパン屋を襲撃しても、サングラスをかけた暴力団風の男には結局負けること、つまり、学生運動の敗北を象徴的に表していると言える。映画が撮られたのは、小説が発表された翌年の 1982 年で、小説が同時代においてどう読まれたのかを実証してもいるだろう。

このように、小説には書かれていない空白を、歌や映画が意味づけていることがわかる。歌や映画は小説の謎を、意味がわかるように描きなおしているのである。

２−４−３．再び春樹を読む

村上自身はこの小説をどう意味づけているのか。次に、『パン屋を襲う』の続編『パン屋を再び襲う』を取り上げよう。『パン屋を襲う』は「僕」と「相棒」が町のパン屋を襲いに行ったものの、ワグナー好きの主人からワグナーの音楽と引き換えにパンをただで食べることになる物語だった。しかし、『パン屋を再び襲う』は結婚した「僕」が再び空腹感に襲われ、妻と一緒にパン屋を再び襲うのだ。この小説では、かつて果たすことができなかったパン屋襲撃を「呪い」として意味づけ、この「呪い」を解くためにパン屋襲撃を再び試みている[37]。

このパン屋襲撃の「後日談」には、興味深い謎がいくつもある。まず「僕」が語る、「呪い」とは何か。「僕」によれば、かつて試みたパン屋襲撃は失敗に終わったということだった。それはこの襲撃を機に、「僕」がかつての自分ではなくなってしまったからだ。働きたくなくてパン屋を襲った「僕」は、今は法律事務所で働くようになっている。そうであれば、「呪い」とは会社で働き金銭を稼ぐようになる現代社会のシステムを指すと言えるだろう。

また襲ったのがパン屋ではなく、マクドナルドだったのはなぜか。直接的な理由として挙げられるのは、深夜で開いているパン屋がなかったことである。しかし、マクドナルドを襲うことに決めたのは、「僕」ではなく、妻である。妻は、最初、「深夜レストラン」で食べることに否定的だった[38]。彼女は、カロリーの高さや食べ物にまつわるイメージのためにどのパンにするかで迷っていた『パン屋を襲う』に登場する「オバサン」のように、「深夜」の「外食」には乗り気ではなかった。その彼女がパン屋襲

---

[35] 『ジョンの魂』〔*John Lennon/Plastic Ono Band*（原題）〕（アップルレコード、1970 年）に収録。
[36] 山川直人監督、村上春樹原作『DVD+BOOKLET「パン屋襲撃」』シネマンブレイン、2001 年。以下の引用は、同書による。
[37] 前掲、51 頁。
[38] 前掲、32 頁。

撃を決めたのは、「僕」のパン屋襲撃を話した後、すなわち「僕」にかけられた「呪い」あるいは夫婦になった 2 人に降りかかる「呪い」を解くためである。この「呪い」のために、彼女が主導となってパン屋襲撃を進めるのだ。そうであれば、マクドナルドを襲ったのは彼女であり、それは男が働いて稼ぐという男性中心の社会システムを撃つためだと言えるだろう。

社会ではなく、2 人で生きるための襲撃。マックに象徴される資本主義社会のシステムを 2 人で組み替えていくための襲撃だとすれば、パン屋ではなくマクドナルドこそ襲撃するのにふさわしい場所である。そうであれば、小説は「僕」の視点から語られているが、彼女の行動は男性である彼には気づかない、他者と共に生きる社会のありようを語っていると言えるだろう。

この『パン屋再襲撃』を映画化したカルロス・キュアロンは舞台を日本からアメリカに移している[39]。映画では、小説が描く日本社会と異なり、アメリカ社会の現実が映し出されている。アフリカ系とラテン系の働くハンバーガー店を襲う白人のカップル。襲撃する側と襲撃される側を描く映画の主軸に対して、シェイクを飲むために一瞬起きるものの、襲撃にはまったく関わることなくすぐに眠り呆けてしまうアジア系の客。客が襲撃の主要なストーリーの軸として描かれないのは、小説の語るように男性中心の資本主義社会のシステムのためなのか、それとも映画の描くようにコミュニケーションにさえ加わることができる者とできない者とに分断されるグローバル社会のシステムのためなのか。小説と映画というメディアあるいは 1980 年代と 2000 年代という時代の差によって映し出される物語の違いには、これからもまだ「パン屋を襲う」必要を見出すことができるだろう。

３．他教科とつくる食の教育

３−１．国語教育から「外」国語教育へ

「食からつくる文学教育」では、食に着目することで文学を日常の生活や現実に引きつけて読むことを試みた。昨今の教育改革によって特に高校の国語教育において「文学」が消える恐れがある点については、これまで触れてきた通りである。この「文学」を切り離し、「実用文」と名づけられた「実社会」と結びつく複数の文章や情報を読み取ることに対して、食からつくる文学教育の方法論を提起したのである。

本章では、文学教育の方法論を踏まえて、いかに食の教育を他教科とつくることができるかを考察したい。食を軸として国語教育から国語教育の「外」へと踏み出すことで、現実の社会と虚構の文学とのつながりを見出したいのである。他教科とつくる食の教育で取り組んだのは、１）学校給食と調理実習に焦点をあてた特別講座「みんなでごはんを学校で食べることとは？」と、２）科学の知見から健康を考え、文学の読解と組み合わせたゼミでの「カラダがほしいもの」、さらに３）コロナ禍において留学を試みた本校の卒業生の講演を軸とした高３三学期講座「コロナ禍の留学の学び方、学ばれ方、学ばせ方」である。以下、それぞれの講座の内容と方法について、詳述したい。

---

[39] キュアロンの映画の特徴については、Gitte Marianne Hansen & Michael Tsang が詳しく論じている（Politics in/of transmediality in Murakami Haruki’s bakery attack stories. *Japan Forum*, Vol. 32, 404-431, 2020.）。

３−２．夏期特別講座「みんなでごはんを学校で食べることとは？」

「みんなでご飯を学校で食べることとは？」からはじめよう。この講座の目的は、文学と生活文化のそれぞれの視点から食について考え、作り、味わうことである。そのためにテーマとして選んだのは「給食」である。「給食」は文学でどのように描かれ、現実の生活でどのように味わわれてきたのか。この考察を通じて、学校で食べること、すなわち給食における「共食」の意味を明らかにすることを目指した。また、この講座では給食を食べるだけでなく、給食を作る意味を追究するために、本務校の生活文化科の梅田有希子の協力を得て、グラタンの調理実習に取り組んだ[40]。

講座は前半を「表現で食べる」として、国語教育の視点から１）給食とは何か、２）給食の表現とは何かという問いについて、それぞれ法律・歴史、文学・音楽・ドラマを題材に用いて考察した。また、後半を「現実で食べる」として、生活文化の視点から１）みんなで作るごはん、２）みんなで食べるごはんというテーマでグラタンを調理し、実食した。

１）給食とは何かという問いから考えてみたい。給食は法律によって規定されている。学校給食法である。1956 年に公布されたこの法律がおよそ 50 年の時を経て 2008 年に改正された。改正法は、学校における食育の推進を図るために、給食を食に関する正しい理解と適切な判断力を養う上で重要な役割を果たすものと定めている。この給食を法律として定めるまでの歴史を紐解けば、およそ 120 年をさかのぼることができる。

藤原辰史によれば、日本で学校給食が始まったのは、1889 年の山形県私立忠愛小学校においてである[41]。私学での取り組みが公共での取り組みとなるのは 1919 年の東京府における学校給食だが、学校給食の普及は 1923 年以降となる。関東大震災のためである。震災をきっかけに各地で炊き出しが行われ、被災者の空腹を満たす活動が広まると、学校においても児童の日常生活を取り戻すための公共事業として学校給食が位置づけられるようになった。また太平洋戦争における敗戦後の焼け跡から日常生活を再建するために、学校給食の法律化が目指された。1946 年に東京神奈川千葉で試験的に給食が開始されたのを皮切りに各地で給食が試みられ、学校給食法が奨励法として公布されたのは 1956 年である。

ただし、給食の法制化とその後の展開には、飢餓の克服を理念として目指す日本政府と、戦後日本の統治を GHQ 主導で進めることを目指すアメリカ政府の思惑がすり合わされていった歴史がある。学校給食にコメの使用が一部認可されたのが 1963 年であることからわかるように、学校給食はアメリカの小麦を日本に導入するための政策でもあった。この食を通じたアメリカナイゼーションが変わるのが 1980 年代中頃である。戦後における日本の経済成長によって、給食の合理化と見直しが図られるようになる。学校給食がパンからコメ食に転換されるのである。後で触れるように、ドラマ『おいしい給食』(2019 年)は、この給食の転換を懐古的に描き出している点で注目すべき作品である。

こうした歴史的変遷を経て、2005 年に食育基本法が公布され、2008 年に学校給食法が改正された。この改正を通じて新たに掲げられた目標が、「食生活が自然の恩恵の上に成り立つものであることについて

---

[40] 「みんなでごはんを学校で食べることとは？」は、本校の夏期特別講座で行ったものであるため、通常授業と異なり、教員が設定したテーマに興味・関心を持つ希望生徒が受講している。受講生の人数は 22 名である。

[41] 『給食の歴史』岩波書店、2018 年、31 頁。

の理解を深め、生命及び自然をする尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」や「伝統的な食文化についての理解を深めること」である。

給食の歴史からわかるのは、貧困や震災、戦禍によって生じた飢餓という問題を、個人や自治体が自主的に、また GHQ に従う形でさまざまに解決しようと進められた未完のプロジェクトであることだ。戦後のユニセフ給食にはじまるアメリカ産小麦粉を通じた洋食化は、1980 年代以降、日米の経済格差の解消に伴って和食へと転換されていく。その過程に浮かび上がるのは、GHQ、政府、あるいは企業といった組織が給食に対して働きかけてきたさまざまな力のありようである。給食は教育の一環ではなく「教育の中心」だったのである[42]。

この「教育の中心」となる力を個人はどう受け止めてきたのか。そこで、２）給食の表現とは何かについて考えてみたい。たとえば、作家の村上春樹は、次のように、給食の思い出を語っている。

> 僕が小学生のころ、兵庫県西宮市立香炉園小学校では秋になると、給食にときどき「まつたけうどん」がでました。もちろん本物のまつたけ（けっこう大きい）が入っていて、だしには香ばしい松茸の香りがしました。うちの奥さん（東京小石川出身）にその話をすると「嘘だよ、そんなの」と言うけど、ほんとなんです。[43]

村上によれば、小学校の給食の思い出は「まつたけうどん」である。1949 年生まれの村上が小学生だったのは、1955 年から 1961 年ごろにあたる。給食の歴史から振り返れば、学校給食法が公布された 1954 年直後であり、コメの一部使用が始まった 1963 年より以前であるため、「うちの奥さん」が言うように「嘘」のような話である。給食の「まつたけうどん」は作家の「嘘」なのか、歴史の事実なのか。

もう１人は、ミュージシャンの甲本ヒロトである。甲本は給食について、次のように歌う。

給食残して叱られた
俺の体を本当に心配してたのか
嫌いなもの口につめこまれた
常識的な発言と非常識な行動だ
うまけりゃ食う　うまけりゃ食う
テレビには映せないものでも
ラジオでは喋っちゃいけない言葉でも
うまけりゃ食う　うまけりゃ食う
まずけりゃ吐くぜ　遠慮なく吐くぜ

---

[42] 前掲、254 頁。
[43] 『CD-ROM 版　村上朝日堂　夢みるサーフシティ』朝日新聞社、1998 年。引用は、読者から「忘れられない給食の味」を問われた村上の答えである。引用に続けて、村上は「僕に言わせれば「給食に納豆？　嘘だよそんなの」ということになります。きっと香川県では毎日給食にうどんが出て来るんじゃないのかな」と述べている。

まずけりゃ吐くぜ　ストレートにぶちまける[44]

1964年生まれの甲本が小学生だったのは、1971から77年で、ちょうど村上が小学生だった10年後にあたる。この歌が歌われた1998年は、学校給食の合理化と見直しが図られる1980年代から食育基本法が制定される2005年のちょうどはざまである。甲本が歌う「給食残して叱られた」背景には、給食が個人にとって「嫌いなもの」でも集団にとっては食べなくてはならない強制されるしくみだったことが挙げられる。

興味深いのは、2000年代以降に生まれた世代にとって、給食は決して甲本の歌うような強制ではないことである。むしろ、多くの生徒は、村上の語るような「地産地消」の「おいしい給食」を思い出として語っている。

この給食をめぐる味の転換を示す物語にドラマ『おいしい給食』がある。ドラマの舞台は80年代である。ある中学校で、給食マニアの教師と生徒が、静かな闘いを続ける。給食マニアの教師・甘利田幸男と、給食マニアの生徒・神野ゴウによる、「どちらが給食をおいしく食べるか」という闘いである。ドラマで用いられるのは箸ではなく先割れスプーンで、教育委員会主導で行われるセンター方式の給食のメニューは、現在から見れば、おいしいというより「変」である[45]。しかし、給食マニアの2人がさまざまに工夫を凝らしておいしい給食に変えていく。

ここには、2010年代の視点から1980年代の日本の給食を振り返る視点がある。すなわち、「残すと叱られる」変な給食から、「残さずに食べたくなる」おいしい給食への変化を捉える目が描かれている。食育基本法以降の表現に読むことができるのは、この給食の歴史を相対化する視点である。

これらの給食をめぐる集団の歴史と個人の記憶を踏まえ、後半ではグラタンの調理と実食を展開した。配給される食を食べるのではなく、与えられたレシピや役割を踏まえた生活文化における調理実習を通じて、みずから食をつくり集団で食べる給食の未来を創造したいと考えたのである。

３−３．言語表現法ゼミ「カラダがほしいもの」

食の視点から国語教育を捉えなおすことで、生活文化との共同授業を試みることで浮かび上がってきたのは、食について考える他教科との共同授業である。そこで、ゼミで「食からつくる文学教育」に続く試みとして科学との共同授業を展開した。それが「カラダがほしいもの」である。

このテーマは、本務校の理科科宮沢真希子（共同研究者）が食事から摂る栄養バランスに注目して、カラダの声としての「欲」に耳を傾ける授業を展開したいという発案から始まった。宮沢は「ぐっすり寝たい」「〇〇が食べたい」「体を動かしたい」「〇〇へ行きたい」といったさまざまな「欲」は人間が感じる素直な感情だとして、この「欲」の中でも日々の生活の中心となる食について感じる欲から、食とカラダの関係を捉える。

健康なカラダをつくるために必要となる食とは何か。また食とカラダの関係はどのように文学で表現

---

[44] THE HIGH-LOWS『ゲロ』、『ロブスター』（キティ、1998年）に収録。
[45] 幕内秀夫『変な給食』ブックマン社、2009年。

されてきたのか。国語の「外」にある科学の知見を踏まえ、食とカラダの関係を文学で教えることを目指すのが「カラダがほしいもの」である。

科学の観点から確認しよう。現代の日本では、周囲を見わたせば、食べるものは溢れ、食べたいものは商品としてさまざまに売られている。人間の欲としての食欲は、メディアの情報や周囲のうわさ、あるいは個々の好みに左右され、胃袋を満たすことになる。しかし、科学から人間を見つめれば、カラダの大半は水分でつくられている[46]。宮沢が示すのは、水分が 62%、タンパク質が 16%、脂質が 15%、ミネラルが 5.6%、糖質が 1%未満という人間のカラダのしくみである。このしくみから、人間には 3 つの栄養素が欠かせないことがわかる。すなわち、カラダの組織をつくるためのタンパク質、カラダのエネルギー源となる炭水化物、効率のよいエネルギー源である脂質である。

タンパク質とはすべての動物と植物の細胞を構成する主要な成分で、生命の維持に欠くことができない。たとえば、筋肉・臓器・皮膚・毛髪などの体を構成したり、ホルモン・酵素・抗体などの体を調節する機能となったりする成分であり、豆・卵・肉・魚などの食品の主要な成分となっている。

また炭水化物は人間の体の主要なエネルギー源であり、炭水化物が体内で分解されてできたブドウ糖は、脳にとって唯一のエネルギー源となる。その意味で、生命の維持に欠かすことができないのが炭水化物である。

さらに脂質は細胞膜やホルモンを構成する成分として重要な栄養素で、脂溶性ビタミンの吸収を助け、体温を保持し、内臓を保護する役割がある。脂質は摂りすぎには注意が必要だが、タンパク質や糖質の約 2 倍のエネルギーをつくり出すという点で、効率のよいエネルギー源でもある。

カラダのしくみを構成する栄養素に着目したのは、現代における食事の栄養摂取量の問題を取り上げるためである。『日本人の食事摂取基準』によれば、「15～17（歳）」／「18～29（歳）」の男女が一日に必要なエネルギーの推定量は、それぞれ男性が 2500～3150／2300～3050 キロカロリー、女性が 2050～2550／1700～2300 キロカロリーだという[47]。『国民健康・栄養調査』では、20～29 歳の男性が必要とする一日のエネルギー量は「2111」キロカロリー、同じく 20～29 歳の女性のそれは「1694」キロカロリーである[48]。

男性より女性の方が一日に必要とするエネルギー量が少ないだけではない。問題は、女性のやせの者の割合が上昇していることである。『1960～2017 年国民健康・栄養調査、20～69 歳』によれば、40 歳以下の女性のやせの者の割合は 1960 年代に 6%だったのが、70 年代には 8%、80 年代には 13%、90 年代には 17%、2000 年代には 25%、2010 年代には 29%台と、およそ 50 年の間に 20%以上も上昇している

---

[46] 左巻健男によれば、「栄養分や酸素の運び役として、また体温や浸透圧の調整役として、水は私たちの生命維持に欠かせない重要な物質である」という（『絶対に面白い化学入門　世界史は化学でできている』ダイヤモンド社、2021 年、108 頁）。

[47] 『日本人の食事摂取基準（2020 年版）「日本人の食事摂取基準」策定検討会報告書』84 頁、https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000586553.pdf、2023 年 1 月 20 日アクセス。なお、エネルギーに幅があるのは、「報告書」で「活動レベル」をⅠからⅢに分け、「活動レベル低い（生活の大部分が座位を中心とする）」、「活動レベル中（座位中心の仕事だが立位を含む）」、「活動レベル高（移動や立位の多い仕事や運動習慣あり）」としているためである。

[48] 『国民健康・栄養調査（平成 29 年）報告書』15 頁、https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000351576.pdf、2023 年 1 月 20 日アクセス。

のである[49]。女性はなぜやせを目指すようになったのか。

日常生活においてカラダは日々代謝を行っている。この基礎代謝量は男性が 15～17 歳を、女性が 12～14 歳を機に次第に減っていくことがわかっている。そのため、年代ごとの基礎代謝量をもとにエネルギーを補う必要がある。エネルギーを補わなければ、どんどん痩せていってしまうからだ。

健康なカラダを維持するために必要となるのは、三大栄養素であるタンパク質、炭水化物、脂質のバランスのよい摂取である。過剰でも過少でもなく、偏りのない摂取がのぞましいのだ。この三大栄養素の中で、摂取エネルギーの比率としてもっとも高い炭水化物に着目しよう。

炭水化物は消化吸収されてエネルギー源になる糖質と消化されない食物繊維に分けることができる。食物繊維は体内に吸収されないので、糖質の吸収を抑えることができ、また腸内の環境を改善してカラダを健康に保つ働きを持っている。つまり、食物繊維を効果的に摂取することは、カラダにエネルギーを取り込みながら、カラダを健康に保つことにつながるのである。

この食物繊維は食事全体の目標量として、18～64 歳の男女にはそれぞれ男性が 21ｇ、女性が 18ｇを摂取する必要があるが、1965 年以降、食物繊維の摂取量は 15ｇ前後で推移している[50]。つまり、男女とも目標量に達していない。食物繊維は一日あたり 24ｇ以上を摂取すると、心筋梗塞や脳卒中、糖尿病あるいはがんなどの発症リスクを低下させることができるという。

この食物繊維を摂取するために、たとえば、レタスでは 100ｇあたり 1ｇの食物繊維を摂取できる。レタス 1 玉がおよそ 400ｇとすれば、一日あたり 4 玉以上を食べなくてはならないのだ。食物繊維を多く含む食物に挙げられるのは、大麦、納豆、アボカド、アーモンドなどで、アーモンドでは 100ｇあたり 9.6ｇの食物繊維が含まれる。必要となる食物繊維の摂取量は一日あたり 20ｇだが、その量を摂るのは非常にむずかしいのである。

健康なカラダをつくるためには、必要な栄養素をバランスよく摂る必要がある。宮沢が提案するのは、「一汁三菜」という言葉に表される、主食となるごはんを中心とした、主菜、副菜、牛乳・乳製品、果物をバランスよく摂る日本型食生活である。また体内リズムと生活リズムとを一致させるために一日の始まりのスイッチとして、朝食を摂ることである。

カラダと同様に、脳はブドウ糖をエネルギー源として使っている。朝食を食べない場合、午前中はカラダが動いても頭はボンヤリしてしまう。それは、寝ている間にブドウ糖が使われて足りなくなってしまうためである。脳のエネルギー源であるブドウ糖を朝食から補給し、脳とカラダを目覚めさせることが必要なのだ。

ごはんなどの主食には、脳のエネルギー源になるブドウ糖が多く含まれている。そこに朝食を毎朝摂る意義がある。宮沢が言う「カラダがほしいもの」とは、食べたいものを食べるだけでなく、日々の生活がカラダをつくることを理解することなのである。

宮沢は、この後の三学期講座で「豆腐を作ろう～木綿豆腐～」に取り組んでいる。目的は、「豆腐をつ

---

[49] 前掲 47、67 頁。

[50] 「野菜やサラダで食物繊維！」https://www.kewpie.com/education/information/dietaryfiber/、2023 年 1 月 20 日アクセス。

くり、豆腐の特徴や科学的性質を知る」ことである。材料に大豆 50g（もしくは 100g でも可)、にがり（液体はそのまま使用可能。粉末は水に溶かして使う必要あり）を、器具にブレンダー、ボール（1〜2 個)、計量カップ、木べら、大きめの鍋、豆腐の型箱用の豆腐パック（1 丁または 2 個付きまたは 3 連のもの)、こし布（布巾など)、温度計、バットまたはお皿、型箱を作るための安全ピンを準備し、１）型をつくる、２）豆乳を絞る、３）豆腐を固めるという手順を踏み、「豆腐作り」を通じた科学知識の習得を行った。大豆に含まれるたんぱく質の成分と性質を科学の視点から生徒が知ることを目指した。

タンパク質はアミノ酸が多数結合してできた高分子化合物で、その性質に熱変性が挙げられる。熱変性とは加熱すると構造が変化し、もとの性質や働きが変わることである。大豆ににがりが加えられると、大豆に含まれるたんぱく質が反発力を失い、沈殿する。この化学変化を「塩析」といい、豆腐がつくられる。このような塩析を通じて豆腐がつくられる化学変化から、生徒は目には見えない粒子の性質を学んだのである。

「カラダがほしいもの」を科学の視点から学んだ後、ゼミで再び文学に描かれた食に着目して食べものの味を考えた。食べものの味は、何より言葉で表現される。その意味で、食は舌だけでなく、言葉で味わうものになる。文学がどのように食を描いてきたのか。その食はどんな食で、どんな風に食べられてきたのか。これらの問いは、食が言葉でどのように表現されるかだけでなく、現実のカラダにどれほど効き目があるかを生徒が考える機会を与える。

「カラダがほしいもの」は、言葉で作られる。「食からつくる文学教育」は、こうして他の教科における食をめぐる教育と結びついていく。味覚についてのある調査によると、味を認識するのは舌ではなく、大部分は視覚や嗅覚で決まる。時には食べ物を噛むときの音が味を決めるのだという[51]。食べ物は舌だけでなく、カラダで味わうものなのである。食とカラダの関係を考えることは、まさに「カラダがほしいもの」とは何かを考えさせてくれるにちがいない。カラダで味わう食べるものは、国語の「外」で食をめぐる教育として結ばれるのである。

３−４．三学期講座「コロナ禍の留学の学び方、学ばれ方、学ばせ方」

最後に、国語の「外」で他教科とつくる食の教育として取り組んだ高 3 三学期の講座について触れたい。「コロナ禍の留学の学び方、学ばれ方、学ばせ方」は、コロナ禍にありながら大学で海外留学を果たした本校出身の先輩の体験から大学で学ぶ意味をつかみ取ることを目的として行った授業である。この授業では、卒業生から留学にまつわる体験を聞き、2 人の教員が卒業生の話を引き出すために質問するという形で進めた。教員からの質問は、１）大学での留学体験を中心とするもの、２）高校での学校生活を中心とするものの 2 つの視点から行った。この質問の中で食の体験に触れることで、高校生から大学生への、また日本から日本の外への変化を高校生が学ぶ機会としたのである。

卒業生の紹介から始めよう。卒業生は本校の中学校に入学した後、6 年間、同じ校舎で中高生活を送り、付属の大学に進学した。進学後には、部活のコーチを現在まで 4 年間務め、本校と深く関わりを持

---

[51] 「わたしたちの舌がだまされやすい理由」『WEIRED』https://wired.jp/2013/08/07/psychologytaste-and-smell/、2023 年 1 月 20 日アクセス。

っている。留学したのは大学３年次の秋・冬学期で、留学した国はカナダである。これまで海外への留学経験はない。

授業を受け持った教員の１人とは中学校における部活での関わりと高校１年生での担任の学年としての関わりがあり、もう１人とは高校２・３年生での担任の学年としての関わりがある。卒業生と２人の教員とは、大学生になった後の部活におけるコーチと顧問の関係として共通の関わりがある。

卒業生が講演で話したのは、自己紹介、高校・大学生活、留学の準備・体験・振り返り、後輩へのメッセージである。講演を聞く対象が高校３年生であるため、高校から大学への変化においてどのように自分が関わってきたのかを中心に話をしてもらうこととした。興味深いのは、卒業生によれば、自分自身を振り返ると、高校生活と大学生活に大きな変化はあまりないという。それは自分の性格が社交的であり、勉強面でも行動面でも仲間とともに楽しみながらどんな活動にも取り組んできたからである。

しかし、コーチとしての役割を自分に課したことは、今までの友人関係における自分のあり方を大きく見つめなおす機会となったからだという。学校におけるコーチは、部活やクラスでの仲間といった高校までの友人関係と異なるためである。卒業生によれば、コーチは技術を教える側に立てば、中学生という年下の、また自分も同じ道筋にいたという意味において過去の自分と向き合う時間であり、ルールを身につける指導を行う側に立てば、教育経験を持つ顧問と同じ目線に立って部員に接するという意味において学生という立場を超えた時間を味わうものとなる。コーチの経験は仲間とともに楽しむというよりも、常に１人になることを試される体験と意味づけることができる。

この１人になる経験がコロナ禍にありながら留学を通じた学びを展開していこうと志す際の原動力だった。カナダへの留学は、大学の留学基準には届いていなかったために、次の手立てとして私費で留学をすることになったという。しかし、コロナ禍にあっては大学で留学をする基準を満たしていても、現実には安全面における懸念から大学での留学がかなわなかったケースがある。こうした状況を乗り越えて留学を果たすことができたのは、先にも挙げたコーチ体験を通じた１人になる強さを身につけたからだといえる。

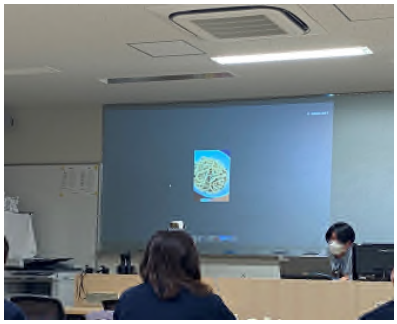
卒業生が留学したのはカナダの語学学校で、6 ヶ月間の寮生活を過ごした。カナダを選んだのは、当時、コロナによる入国規制がもっとも低かったからだ。このカナダへの留学で学んだのは、積極的に行動することと多様性の理解だった。

日本とは異なり、カナダでは自分から話をしなければ誰も自分を理解してくれることがない。留学前に準備しておけばよかったと後悔したのは、留学してからも英語を勉強したことである。現地にいれば、話をするのも話を聴くのもすべて英語である。つまり、英語は勉強するものではなく、使用するものだった。このツールとしての英語を活用するために、英語の勉強は留学前にしておくべきだったということである。勉強ではなく日常の生活や遊びにとことん時間を使うことがそのまま語学の勉強になるということでもある。

また語学学校で出会った学生は、韓国人や中国人といったアジアから、ブラジルやチリといった南米、スペインやイタリアと言ったヨーロッパまで、さまざまな国籍と人種がまざりあっていた。顔は似ていても、はっきりと意見を主張するアジア人や、週末には必ずといっていいほどパーティーを楽しむラテ

ン系の人々など、カナダでの出会いは世界の広さを直接感じさせるものだった。

さらに、こうした多様な文化や異なる言語を背景に持つ人々との出会いは、食を通じた交流をつくるきっかけももたらした。【写真】からわかるように、日本では一人暮らしの経験のなかった卒業生にとって、はじめての料理は見よう見まねでつくった納豆スパゲティーだった。しかし、さまざまな友人と鍋を囲み、カナダにはない肉じゃがをふるまい、唐揚げでパーティーを開くまでになる。料理をつくる変遷には、自分の世界が広がっていく感触があった。



【写真】

卒業生によれば、語学は留学のための手段であり、目的は何よりも世界の人々と友だちになることである。それは世界にはさまざまな言語と文化があることを楽しむことだという。卒業生がコロナ禍の留学を通じて身につけたのは、他人の価値観をそのまま受け取るのではなく、自分の選択を通じた行動から自分の価値観で世界と出会うことである。誰かと比べるのではなく、自分にしかできない分野で一番になること。卒業生が講座で生徒に伝えたメッセージは、個になる強さでさまざまな人と楽しさを分かち合うことである[52]。

４．異文化とつくる食の教育

４−１．カナダから韓国へ

「異文化とつくる食の教育」として挙げるのは、カナダの高校・大学と韓国の高校との交流活動である。カナダとの交流活動は、本務校が高校の全学年を対象に行ってきた夏期語学研修（2 週間）がコロナ禍により実施できなくなったために、昨年度からオンラインで実施してきたものである[53]。

１つはブリティッシュコロンビア州立ロイヤルローズ大学が日本の高校生に提供する「環境リーダーシップ」教育で、同大学の Tia Benn 氏と夏期の 2 日間にわたってオンラインを通じて環境教育を学習した。環境リーダーシップは、日本ではあまり馴染みのない言葉だが、環境先進国としてのカナダでは人々が自然に積極的に関わり合いながら、日常の生活を通じて日々進行する環境汚染を食い止めるための活動を行っていることがわかった。このことは、カナダでの先進的な取り組みを英語で学ぶというコンテンツの魅力にとどまらず、オンライン後の日々の生活の見直しを図るものとしても有効である。

もう１つは同じブリティッシュコロンビア州に位置するアバディーン・プレパラトリー・ホール・スクールとの交流活動で、冬期の 2 日間にわたって同高校の担当者 Elain Clevo 氏と協働して互いの文化への理解を深める交流活動を行った。特筆されるのは、本校に長期（1 年間）で滞在する留学生 3 名とともに、カナダの高校生と英語で日本、カナダ、フィリピン、マレーシア、バングラデシュといったそれぞれの文化を知るために、食を活用したことである。食は、文化によって大きく異なるが、生活に欠

---

[52] 卒業生による講演の他に、三学期講座では学外から山﨑吉朗氏（日本私学教育研究所）を招き、外国語教育の視点から大学における学びを伝える授業を行った。題して、「英語以外の外国語から考える大学の学び」である。

[53] 本校で実施しているカナダへの語学研修は、いずれも VIEC International 社の協力を得て行っている。他にドイツへの研修があるが、こちらは訪問するオステー・ギムナジウム・ティメンドルファー・ストランド校の担当者が計画を一手に担っている。

かせない習慣であるという意味で、誰にとっても必要不可欠なものである。食に着目することでわかったのは、日本の高校生にとって本研修が英語を学ぶにとどまらず、カナダを含めた異なる文化を知り日本の文化を伝える活動となったことである。

これらカナダとの交流活動は、英語で環境や食というコンテンツを学ぶことで、オンライン後の日々の生活でも英語学習への意欲を駆り立て、また日常の習慣を見直すきっかけを与えるものとして評価できる。一方で、問題として挙げられるのは、教育機関では英語を学ぶことに常に費用が伴う点である。これは英語がグローバル化に伴って世界の標準語として用いられており、教育が英語を身につける人材を育成するプロジェクトとみなされているためである。英語の覇権は、英語を学ぶことが単に異言語や異文化の理解だけでなく、政治的経済的理由と密接に関わっている証左でもある。

４−２．韓国との交流活動の始まり

そこで、今年度、英語圏だけでなくアジア圏との交流活動を試みることにした。それが韓国との交流活動である。韓国との交流活動は、韓国のソウル市特別教育庁の発案で、日本の文部科学省総合教育政策局国際教育課から通知された「2022 通訳・翻訳プログラムを利用した国際共同授業」への参加から始まった。これは、「小・中・高等学校の児童生徒を対象とし、ZOOM などのウェブ会議システムを利用して交流授業を行う」もので、「通訳・翻訳プログラムを介するため、それぞれの母国語での交流」を想定したプログラムである。

後でも述べるように、当初想定した「通訳・翻訳プログラム」は日本語への翻訳がインターネット上の機械翻訳にとどまっていることに加え、韓国の日本語を担当する教諭の日本語能力の高さから、事前の打ち合わせで試みたほかは用いておらず、交流活動での使用言語は日本語である。

はじめにスケジュールを確認し、次に韓国との交流活動の詳細について説明したい。まず 2 月にソウル市特別教育庁宛てに申請を出し、4 月に教育庁から直接取り合うよう連絡があり、紹介されたのが徳成女子高等学校である。当校で日本語を担当する張日榮とメールで今年度の交流活動の目的について意見交換をした後、5 月に ZOOM を用いてオンラインで互いの紹介を交わし、授業計画について話し合いを進めた。6 月にも ZOOM で「通訳・翻訳プログラム」を試し、事前の準備にあてた。

これらの準備を進め、実施したのが 7 月の夏期特別講座「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」である。夏期特別講座に加えて、9 月、10 月には本務校における必修選択講座の言語表現法ゼミとメディア・スタディーズの受講生合わせて 19 名を対象にした、「“満腹”の味」という合同授業を行った。この「“満腹”の味」では「もし日本あるいは韓国に行くことができたなら紹介したい一日のプラン」をグループで語り合い、発表した。

さらに 1 月、2 月には三学期講座において「日本で出会う韓国」と題し、韓国の都市と交流する東京都の自治体に訪問し、インタビューを行う予定である。また、新大久保のようなコリアンタウンに赴き、日本における韓国の文化を見つけることを計画している。日本における知られざる韓国の歴史と身近な文化について韓国の学校に向けて発表することで、日本と韓国の交流の史的展開を学習者が把握することを目指している。

次に、韓国の交流活動について述べよう。2022 年度に交流活動として展開したのは、先に触れた、夏期特別講座「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」、言語表現法ゼミとメディア・スタディーズとの合同授業「“満腹”の味」、三学期講座「日本で出会う韓国」である。これら 3 つの交流活動に今後の展望を加えて、それぞれの内容、方法、課題を詳述したい。

４−３.「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」１日目

【資料２】に示したように、「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」の目的は、日本の外で日本語・日本文化を学ぶ海外の生徒との交流から翻訳を通じたコミュニケーションの方法を身につけることである。1 日目は、「自己紹介」と「互いの国のイメージ」をテーマにした話し合いを行った。「自己紹介」では、韓国の張を含め 5 人の教員ごとにグループを作り、高校 1〜3 年の日本側の参加生徒と、韓国側の参加生徒で 20 分程度互いを知り合う時間を作った。日本の参加生徒は、高 1 が 13 名、高 2 が 6 名、高 3 が 9 名で、韓国の参加生徒は高 2、高 3 合わせて 10 名である。このあと、「互いの国のイメージ」について、全体で日本から韓国に、韓国から日本にという順番で、相手の国に持っている勝手なイメージすなわちそれぞれの「偏見」について質問し、その問いに応えるという形式で講座を進めた。

高校 1・2 年と高校 3 年の参加生徒で開始時間が行事の都合で異なっていたため、事前の課題として話し合いの時間での質問を準備してくることにした。それが、「自己紹介」の際にグループで話し合うための下記の 3 つの項目である。

A 自分がこの講座を受講した理由
B 自分の MBTI
C その他、自分を知ってもらうための簡単な情報

B に挙げた MBTI とは、近年、韓国で流行している 16 のキャラクターに分類した性格診断テストである。張によれば、韓国の高校生で知らないものはいないという。日本では講座を受け持った教員 5 名のうち知っているのは 1 名で、参加生徒 28 名のうち 3 名が知っているのみであった。同じ高校生年代でも流行に違いがあることを実感し、互いの文化への興味を引き出すために、講座では MBTI を取り上げた。

また、「互いの国のイメージ」を全体で話し合うための項目としたのは、下記の 3 つである。

A 自分が韓国について知っていること
B 韓国はこんな国だというイメージ
C その他、相手に聞いてみたいこと

日本の生徒が韓国に抱いているイメージ、言い換えれば、授業という枠組みでなくては聴けないような自分の思い込みを韓国の生徒にぶつけてみることで、互いの国のイメージと実際とで異なる点と重なる点に着目するようにした。

４−４.「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」１日目の振り返りと課題

日本と韓国の教員の振り返りと生徒の感想からどのような交流活動だったかをまとめたい。日本の教員から出されたのは、ブレイクアウトルームでの少数の話し合いが効果的だったことである。オフラインと異なり、オンラインでの交流は同じ場にいなくても一対多のコミュニケーションが行える点で便利であるが、議論する場合には少数で話し合う方が親密な関係を作りやすく、ZOOM におけるブレイクアウトルームの機能は大変効果的であった。

しかし、MBTI のように流行の度合いが韓国と日本とで異なっており、韓国の生徒はよく知っているのに日本語で説明するためにうまく伝えることができず、逆に日本の生徒はよく知らないために日本語でも説明がうまくできず、なぜ交流活動で MBTI を取り上げたのかが十分に伝わっていないように見受けられた。

また「互いの国のイメージ」についての「偏見」はブレイクアウトルームではなく全体で話し合うこととしたために、参加者全員が発言することができなかった点が課題として挙げられた。さらに、1 回目ではブレイクアウトルームにおけるファシリテーターを教員としたが、生徒にも割りあてた方が議論を主体的に生徒集団がつくることができる可能性が挙げられた。

一方、韓国の教員から出されたのは、ブレイクアウトルームでの活動において生徒が互いに活発に話せた点は評価できるものの、韓国の生徒が感じた「言葉の壁」である。「自己紹介」は学習した日本語でできても、韓国で流行し自分も興味を持つ MBTI について詳しく説明することや自分の意見をうまく伝えることができないもどかしさを感じたという韓国の生徒の声が伝えられた。

また、韓国の生徒は、インスタグラムやラインで「友達追加」をするために携帯電話の所持を許可していたが、本務校では普段の学校生活のルールに則って携帯電話の所持を許可していなかったために、交流活動後も SNS で交流を続けようと考えていた韓国の生徒の期待に添えることができず、残念だったという意見が挙げられた。

４−５.「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」２日目

2 日目は、一週間後に行われた。韓国の生徒は同じ 10 名の参加であったが、日本の生徒は学校行事のために高 3 のみの参加となり、韓国側とほぼ同じ 9 名であった。1 日目のテーマであった、互いの自己紹介と、日本と韓国のイメージについての「偏見」を話し合い、それぞれの世界への理解を深めていくことを引き継ぎ、2 日目のテーマとしたのは、食文化である。1 日目と異なり、2 日目は日本と韓国の生徒が 19 名ほどの小規模であったため、話し合いがうまくいかない場合にブレイクアウトルームを活用することとし、全体での話し合いから講座を進めることとした。

まずは、1 日目の振り返りとして、全体で互いの自己紹介、MBTI、日本・韓国文化についてのそれぞれの「偏見」をあらためて話し合った。次に、2 日目のテーマである「互いの食文化のイメージ」について話し合った。事前に教員間で話し合いの具体例として挙げたのは、食べたことのある日本食・韓国食、紹介したい日本食・韓国食、食習慣やマナーの共通点と相違点で、「互いの食文化のイメージ」について

話し合うこととした。最後に、2 日間の振り返りとして、講座の感想を互いに述べるという形式で進める計画を立てた。

４−６.「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」２日目の振り返りと課題

2 日目の講座の内容について、日本および韓国の教員の振り返りと生徒の感想からどのような交流になったかをまとめよう。日本側の教員の振り返りとして挙がったのは、講座が自己紹介や食文化についての Q&A から成り立っているだけであるにもかかわらず、生徒が通常の授業よりも格段に活き活きとした様子で話し合いを進めていたことである。教え手の持つ知識を学び手に与えるよりも、学び手の抱く好奇心を満たすきっかけを教え手がつくることが重要だとあらためて認識することになった。

また日本の生徒の感想からうかがえたのは、韓国の生徒から紹介されたさまざまな料理の名前がわからなくても、どんな料理かを説明する言葉から実際に現地で食べてみたいという意見である。張からは講座で「ほとんどは辛いものですよ」と説明があったものの、その辛さが料理の名前と同様にわからなかったのである。このことは、韓国語という外国語と同様に、韓国料理という異文化への興味と意味づけることができる。日本の生徒には、慣れない韓国語の音が自分の舌になじむまでの時間と距離を感じる経験をもたらしたと言えよう。

また【資料３】に挙げるように、韓国の生徒が書いた感想からは、日本語を勉強している高校生の素直な姿がうかがえる。張によれば、交流の感想文は韓国語で書いてもよいと伝えたのにもかかわらず、全員が日本語で書いた。生徒のほとんどは翻訳機を使って書いたために、ところどころにおかしな表現があるが、修正せずにそのまま送ることとしたという。

しかし、この「おかしな表現」が日本の生徒には逆に勇気を与えるように感じられた。日本の教員から挙がったのは、本校の（あるいは日本の）生徒たちは「完璧主義」に見えることである。外国語を母語のように完璧に使用できなければだめだ、という考えの生徒が多く見受けられるのである。しかし、韓国との交流活動からわかったのは、大切なのが完璧さではなく、「伝わる」ことだった点である。たとえその場で十分に自分の意見が話せなかったとしても、あるいは機械翻訳を用いた一見稚拙に見える表現であっても、相手に自分の意見を伝えようという意志を持つこと。この伝えたいことが互いに伝わると感じられる体験が交流活動を継続していくための要ではないだろうか。

４−７.「“満腹”の味」の始まり

次に、高 3 の必修選択講座である林の担当する言語表現法ゼミと、宝利彩夏の担当するメディア・スタディーズの合同授業「“満腹”の味」について述べたい。「“満腹”の味」というテーマは、言語表現法ゼミで今年度取り組んできた食をテーマにした授業を引き継ぐものである。

一学期は「“果物”の味とは何か」「“空腹”の味とは何か」について文学と音楽を組み合わせながら、グループ討議を通じて食から文学を読む方法論の習得を目指してきた。この食を通じた文学の読解から他のメディアに変換された食と表現の考察を経て、二学期のテーマとして選んだのが食から考える異文化である。自文化だけでなく異文化の食についても考えるという意味で、タイトルに「“満腹”の味」と

名づけた。合同授業には先の夏期特別講座に参加した生徒も数名いたが、この合同授業では食に焦点をあてて一学期の授業テーマに沿って徳成女子高校との交流活動を展開した。交流活動ではメディア・スタディーズの生徒を加えて参加者が 19 名となり、通常のゼミの人数よりも多いという意味でも、「“満腹”」を味わう授業となった。

合同授業は、9 月 5 日と 20 日の 2 回にわたって行った。【資料４】に示したように、第 1 回と第 2 回はそれぞれのテーマを「夏の思い出」「“満腹”の東京、“満腹”のソウル」とし、合同授業の後に韓国との交流活動に引きつけた授業を行うこととした[54]。

４−８．「“満腹”の味」の内容と方法

合同授業「“満腹”の味」で学んだことを第 1 回と第 2 回ごとにまとめよう。第 1 回のテーマは、夏期休暇の直後という時間設定を活かした「夏の思い出」である。思い出に食を組み合わせることで、食が「食べるもの」であるだけでなく、「食べること」がどのような意味を持つかを考えるきっかけとしたのである。

本実践の方法は、先に行った夏期特別講座での経験を生かし、ZOOM のブレイクアウトルーム機能を通じて、3 人の教員ごとにグループを分けて少人数で話し合いができるようにした。日本および韓国の生徒ができる限り互いに意見を交わすことができるようにするためである。

一方、第２回はテーマを「“満腹”の東京、“満腹”のソウル」として、実際に韓国の生徒が日本に来たら、一緒に東京を“本気”で歩きたいプランを提案することとした。提案するグループは、メディア・スタディーズと言語表現法ゼミのメンバー19 名を男女別に分けた。というのも、韓国側は女子校で、女子だけのメンバーからなるためである。韓国側と同様に、日本側もあえて男女別に分けることで、それぞれのジェンダーから見た東京とソウルの姿を味わえるだろうと考えたのである。韓国の側は、実際に日本の生徒が韓国に来たら、一緒にソウルを歩く「“満腹”のソウル」プランを考えてもらった。

４−９．「“満腹”の味」第１回の振り返りと課題

「“満腹”の味」第 1 回で取り上げたのは、「夏の思い出」である。夏期休暇を終えて久しぶりに再会するクラスメイトへの土産話であるだけでなく、はじめて出会う韓国の生徒への自己紹介も兼ねたテーマとなった。またオンラインというメディアを介した活動であるため、目の前のクラスメイトとともにオンライン上の韓国の生徒へという二方面の聴き手に向けたコミュニケーションとなった。

二学期最初の授業でもあり、これらの点が交流活動の課題になると予想していたが、ほとんど問題にはならなかった。初発の授業であるにもかかわらず、日本にいながら韓国という異文化を知る機会であったこと、またオンライン上であっても自己紹介や自分の思い出を話すことを通じて互いを知る活動であったことから、ふだんの授業よりも活発に意見や感想が交わされる様子であった。

---

[54] 合同授業の後に言語表現法ゼミで取り組んだのは、先の「２．食からつくる文学教育」で述べた、夏目漱石『現代日本の開化』と村上春樹『パン屋を襲う』の読解である。食から異文化を考える本実践との関わりを意識づけながら、食から文学を読む実践のまとめを行った。

【資料５】に挙げた日本の生徒の感想文からもうかがえるように、日本と異なり韓国の高校では第二外国語が学ばれていること、また学習言語にもかかわらず、多くの韓国の生徒が日本語を流暢に話すこと、さらに日本の文化について興味を抱く韓国の生徒の様子から自らの外国語や異文化への態度を振り返って考えることなど、多くの刺激を受けたことがわかる。

４−１０．「“満腹”の味」第２回の振り返りと課題

この第１回の導入を経て、「“満腹”の味」第２回では、「“満腹”の東京、“満腹”のソウル」と題して、日本と韓国の教員はそれぞれの都市で生徒におすすめする「ごはん」について、また日本と韓国の生徒はそれぞれの都市でもし一緒に時間を過ごすとしたらどんな一日を計画するかについて話すこととした。教員のおすすめの「ごはん」は、丸くて甘くなくて麺でもない「ごはん」とは何か、鍋にラーメンと牛肉のミンチが入っていて、ヘルシーではないが時々無性に食べたくなってしまう韓国料理とは何か、湯豆腐に近いが、大根おろしにネギがちりばめられている和食とは何かといったように、YES/NO 形式で答える質問にして、少しずつ答えがわかってくるように工夫をした。答えは、それぞれハンバーガー、プデチゲ、揚げ出し豆腐である。

生徒による一日のプランは男女にグループを分け、日本側と韓国側でそれぞれのおすすめを提案することとした。先にも述べたように、男女のグループ分けは韓国側が女子校であることを踏まえたものである。日本の男子グループのプランは、朝にピザ、寿司、ケバブと東京で味わえる各国料理をつまみながら、夜に「次郎らーめん」を食すという「がっつりプラン」であった。

韓国側は３つのグループに分かれ、それぞれから韓国料理の朝昼晩のおすすめを話してくれた。韓国は辛い料理ばかりではないと言っておすすめしてくれたのは、ジャージャー麺、豚ホルモンでは一番高いというマッチャン、日本の生徒も知っているにちがいないと紹介してくれたブルダックポックンミョンである。聞き慣れない発音から、いずれも現地で食べてみたい「未知のごはん」への興味がかき立てられた。

日本の女子グループは、豊洲から月島、秋葉原、浅草へと具体的な場所と、その土地ならではの食べ物を組み合わせたプランを提案した。そのため、韓国の生徒からもアキバのメイド喫茶やアニメイト、浅草での浴衣についてなど、たくさんの質問が寄せられた。

合同授業における２回の交流活動を通じて考えたのは、日本と韓国で互いに異なる文化に生きる現実にいかに接点を見出すことができるか、あるいは、いかに異なるものを異なるもののまま見ることができるか、である。合同授業は、それぞれの講座の名称にある「言語」「文化」「メディア」といった表現ではなかなか実感できない異文化の結び方について触れることができたと言える。食を切り口とすることで、互いの好みやそれぞれが属する文化圏をあらためて認識するとともに、他者の属する文化への興味や関心が自らの枠を超える始まりの一歩となることが実感された。

今後の目標として掲げるのは、オンラインだけでなくオフラインで、互いに紹介し合った一日のプランを実際に歩き、食べることである。本章の最後に、三学期講座「日本で出会う韓国」の計画について取り上げたい。

４−１１.「日本で出会う韓国」の始まり

三学期講座は、本務校で行われている大学進学者向けのスタートアップ授業である。二学期に行った合同授業を踏まえ、オフラインでの現地研修を計画したが、今年度はコロナ禍での海外渡航でもあり、安全対策上の問題を抱えているため、次年度以降に韓国の高校との現地での交流活動を目指すことにした。研修の目的は、「オンラインでの交流活動を経て、直接韓国の文化・言語と出会い、未来の日韓交流を作る生徒を育てること」である。今年度、オンラインでの交流活動を牽引した張日榮の協力を得て、12 月 27 日に韓国の徳成女子高校を訪問し、また 1 月 4 日に 2 回目のミーティングを通じて、【資料６】に掲げる計画を進めている。1 月 30 日には、張が日本に訪問する予定であり、今度は日本の学校体験を予定している。

この韓国への研修の次善策として、日本で韓国を再発見することをテーマとした新たな計画を立てることとした。題して、「日本で出会う韓国」である。この三学期講座はオンラインでの交流を引き継いで行うものだが、韓国の生徒に向けて日本で探し出した韓国なるものを紹介し、韓国の文化が日本でどのように「翻訳」されているかを伝えることで、互いの交流の歴史を学ぶという内容を新たに加えた。

張からの発案で、韓国の各都市と姉妹提携を結ぶ東京を含めた日本の自治体へのインタビューを実施することとした。日本で探し出す韓国については、当初、三河島や新大久保といったコリアンタウンを歩くことを計画していたが、この日本の中の韓国文化とともに、日本と韓国の交流の歴史を加えることで、K-POP をはじめとした流行文化を下支えする交流の史的展開を紐解きたいと考えている。

４−１２.「日本で出会う韓国」の内容と方法

三学期講座「日本で出会う韓国」は 3 回に分けて実施する。1 回目は、日本側と韓国側の教員がそれぞれのテーマで授業を行うことである。授業のテーマは、「ドラマから見える韓国と日本」、「日本のウトロ地区における韓国」、「「日本で出会う韓国」に期待すること」で、それぞれ韓国の表象文化、現実の日本社会、自身の私的体験から見える韓国と日本の交流とその歴史について講義する。また、各講義の後に、3 名×4 つのグループに分かれ、それぞれのグループが訪れる東京都の自治体で韓国との国際交流を担当する職員への質問を考え、2 回目の授業の準備を行う。

2 回目は韓国との交流を展開する東京都の自治体へのインタビューとコリアンタウンの散策である。日本と韓国の交流の歴史を知り、日本の中の韓国の文化を知ることで、韓国の生徒に向けて日本における韓国の文化と歴史について伝える機会とする。

3 回目は 4 つのグループが PPT を用いて 2 回目で発見した日本の中の韓国について発表する。時間は 20 分を予定しており、それぞれ１）自治体へのインタビューでわかったこと（6 分）、２）コリアンタウンで発見したこと（6 分）、３）まとめ（3 分）、４）質疑応答（5 分）を予定している。

三学期講座は、これまで行ってきたオンラインでの韓国との交流活動に、日本の生徒が日本に潜在する韓国文化と歴史を発見するというオフラインの活動を加えて行うものであり、今後の韓国への研修に向けた具体的な一歩になるものと期待できる。韓国の文化と歴史に着目することで、日本の生徒が日本

の中の見えざる韓国に目を向ける経験を作ることを目指して、オンラインからオフラインへと通じる異文化交流の具体化を図りたい。

５．おわりに

本研究で取り組んだのは、食がつくる国語教育とは何かを明らかにするために、その内容と方法を具体化し、食がつくる国語教育のあり方を方法論として示すことである。この試みを通じて、本校を含む他私学の教育実践にも寄与するものとなることを目指した。

食がつくる国語教育で提起したのは、3 つの教育実践である。1 つ目の「食からつくる文学教育」では、ゼミで展開した食から読む文学の読解と方法について述べた。扱ったのは、日本の近現代文学を中心としたインターネット『青空文庫』や教科書に掲載されたテクストである。食から読む文学は、文学が単に芸術的な表現であるだけでなく、日常の生活や現実の社会と深く結びついた表現であることを伝える。この文学が実社会との関わりを持つという視点は、昨今の国語教育をめぐる問題に対して文学教育の持つ新たな可能性をもたらすにちがいない。今後の課題として、近現代の文学だけでなく、古典文学や英語を含む他言語から翻訳された文学との接続が挙げられる。

2 つ目の「他教科とつくる食の教育」では、特別講座、ゼミ、三学期講座における生活文化、理科、留学と食がつくる教育の内容と方法を取り上げた。扱ったのは、給食の歴史と調理実習、カラダの栄養と豆腐の作り方、留学と食である。それぞれの題材は、食を取り入れた国語教育が他教科や教科の枠を超えた活動へと展開しうる可能性を提示する。今後の課題として挙げられるのは、さらなる教科との連携である。英語や社会あるいは体育といった他の教科との共同授業から、国語教育の専門性を活かしつつ、他教科の専門性とも響き合う教育活動をつくる手立てを見出したい。

3 つ目の「異文化とつくる食の教育」では、海外の学校とオンラインで展開した食をめぐる教育に関する内容と方法を述べた。扱ったのは、コロナ禍における韓国の学校との文化交流である。食を取り入れた交流活動は、互いの文化の異なりと重なりに目を向け、隔てられた時空間を遠ざかるのではなく近づける体験となる。今後の課題として、オフラインで双方が現地に赴き、互いの文化と言語を実感し合う体験をつくることを挙げたい。

食をめぐる教育は、自他の文化の広がりと深まりについて理解し合う体験をもたらす。本研究の発見は、食がつくる国語教育の方法が従来の国語教育を内破しながら、その「外」との関係を構築する運動となる点を見出したことにほかならない。

【資料１】言語表現法ゼミ「学習予定表」

２０２２年度　学習予定表

教科（国語）　学科（言語表現法ゼミ）　学年（５・６）年　　単位数（２）

年間目標　今年度のゼミの目標は、日常の生活と社会とのつながりを関連づけることができるようにするために、文学・映画・音楽などに描かれた“食”を軸にして言語表現の意味を考えることです。ゼミでは、議論と発表を中心に進め、各種コンクールにも臨みます。“食”の視点から言語表現の広がりと深まりを見つけていきましょう。

担当．林　圭介

使用教材
テキスト
副教材等

・課題本は、毎回の授業で読み通します。
・授業で扱うテキストについては「学習内容」に沿って　適宜指示を出します。

学	期	時間数	学習内容	学習上のポイント	備考
I	中間	5	**―“果物”の味―** 文学：芥川龍之介『蜜柑』青空文庫 梶井基次郎『檸檬』教科書 太宰治『桜桃』青空文庫 音楽：マカロニえんぴつ「レモンパイ」 映画：David Leitch. *Bullet Train.*	コロナ禍で“食”はこれまでの日常を一変させつつあります。生きる上で欠かすことのできない“食”をテーマに、自分と社会とのつながりを一緒に捉えなおしていきます。 1学期中間は、“果物”をテーマにしたさまざまなジャンルの作品を扱います。取り上げるのは、文学、音楽、映画です。これら複数の作品に描かれる“果物”の味を比較することで、食文化と言語表現の関係を考えていきましょう。	【授業の進め方】 今年度「言語表現法ゼミ」では、“食”を通じて日常の生活と社会のつながりを学びます。そのために、“食”が言語や音声、映像、などを通じてどのように表現されてきたかをさまざまな形で考えていきます。それは、文学、音楽、映像などの作品を自分の「身体」で読んで聴いて観て「味わう」ことだと言えます。 したがって、ゼミでは毎回たくさんの作品を「味わう」ことになります。自分の好みとは異なる「味」に挑戦してください。 その他に、各種投稿に取り組みます。夏休みは「小説甲子園」に、２学期は「絵本翻訳コンクール」に投稿します。 【授業ごとの課題】 毎回の授業で本を通読します。本は「青空文庫」を用います。「学習内容」で二重下線を引いたものです。ここに挙げたもの以外も、取り上げるので、必ずケータイを持参してください。ゼミ発表に向け、名作の「味」をもとに、自分の「味」を発見していきましょう。
	期末	5	**―“空腹”の味―** 文学：宮沢賢治『よだかの星』青空文庫 村上春樹『恋するザムザ』 音楽：あいみょん「Ring Ding」 映画：Guillermo Del Toro. *The Shape of Water.* 宮崎駿『千と千尋の神隠し』	1学期期末は、甘い果物の味から一変して、食べないこと、すなわち“空腹”を味わいます。自ら食べないと選択すること、食べられない状況を余儀なくされること、食べても食べても空腹を感じること、さまざまな“空腹”の意味を味わいながら、“食”と表現についての考えを深めていきます。 また、夏休みに「小説甲子園」に取り組みます。“食”を〈読む〉から〈書く〉ことへと進めていきましょう。	
II	中間	5	**―“満腹”の味―** 文学：夏目漱石『現代日本の開化』教科書 パク・ミンギュ『カステラ』 音楽：Superfly「Gifts」 映画：ポン・ジュノ『パラサイト 半地下の家族』 Carlos Cuarón. *The Second Bakery Attack.*	2学期中間は、ふたたび食べることに目を向けます。日本の近代の幕開けでは何を食べたのか、また隣国では、今、何を食べているのか。文学から、音楽、映画まで、さまざまなジャンルにおける“満腹”がどのように異なり重なるのかを考えていきます。 また、「絵本翻訳コンクール」に取り組みます。異なる言語に置き換えるだけでなく、異なる文化への理解を深める手立てとしましょう。	
	期末	5	**―“料理”の味―** ゼミ生による発表 文学：坂口安吾『ラムネ氏のこと』青空文庫 Haruki Murakami. *The Wind Cave.* 音楽：ヨルシカ「月に吠える」 映像：Saucy Dog「君ト餃子」	２学期期末は、文学の表現、映画の字幕、音楽の歌詞などを題材に、各自がテーマを設定して 10 分のプレゼンテーションに取り組みます。今年度は「通訳翻訳プロジェクト」（韓国・徳成女子高等学校との共同授業）を通じて、ゼミ発表を行います。これまでゼミで学んだ成果を活かし、海外の学習者に向けて、自分の考え＝「味」を込めたプレゼンを作ってください。 また、近年、話題になりつつある文学、音楽、映像の融合を目指した新たな表現に着目し、メディアが芸術をいかに“料理”するかを考えていきます。	

【資料２】夏期特別講座「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」

１. 講座のタイトル

韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界

２. 講座の紹介文

この講座の目的は、日本の外で日本語・日本文化を学ぶ海外の生徒との交流から翻訳を通じたコミュニケーションの方法を身につけることです。交流に参加してくれるのは、韓国のソウルにある徳成女子高校で日本語を学んでいる高校生。オンラインで 7 日（木）1400-1530 および 14 日（木）1310-1500 の 2 日間にわたって開催しますので、両日参加できるもののみ受講できます。またオンラインのため、マルチメディア教室Ａで行います。

7 日は、互いに自己紹介をした後、日本と韓国のイメージを話し合います。互いの「偏見」を話しながら、それぞれの世界への理解を深めていきましょう。14 日は、7 日の話し合いをもとに、あるテーマを設定して、ディスカッションを行います。交流活動に用いるのは、韓国の生徒が外国語として学んでいる日本語です。したがって、基本的に日本語で交流を行いますが、日本語が通じない場合は互いの学習言語である英語を用いて意思疎通を図ります。

受講を希望する生徒に求められるのは、韓国の言語や文化を知りたいという意欲を強く持っていこ

とです。日本の外に行って異文化を理解したいと考える生徒にもおすすめの講座です。

２）講座の対象学年、内容・進め方

7 日：高 1～3（各学年 10 名以内）、自己紹介→日本と韓国のイメージについてそれぞれＱ＆Ａ

14 日：高 3 のみ（7 日に参加した高 3 生徒）、興味・関心のある互いの文化についてディスカッション

３.１日目の講座の進め方

０）テーマ

「互いの自己紹介」と「互いの国のイメージ」

１）日にち

2022 年 7 月 7 日　1410-1540

２）参加生徒

日本の高 1：13 名、高 2：6 名、高 3：9 名、韓国の高 2・3：10 名

３）参加教員

日本：4 名、韓国：1 名

４）スケジュール

1330 高 1、2　マルチメディア A 集合。

→接続チェック、オンライン授業での注意事項伝達、韓国への質問、MBTI などを準備。

1410 高 3　マルチメディア A 集合。質問、MBTI は事前にプリント配布。

1420 自己紹介

→ブレイクアウトルームを活用して、張を含む 5 名の教員と、日本生徒 6 名ずつ、韓国生徒 2 名ずつの割り振りで、氏名、受講した理由、MBTI などを各グループで紹介。

1440 韓国と日本のイメージについての話し合い

→日本生徒から韓国生徒へ「韓国は〇〇ですか？」、次に、韓国生徒から日本生徒へ「日本は〇〇ですか？」を質問し、討議。

1530 各教員から一言

→生徒には今日の講義の感想を記し、次の授業（まで）に送る。

1540 講義終了

４．２日目の講座の進め方

０）テーマ

「互いの食文化のイメージ」

１）日にち

2022 年 7 月 14 日 1430-1610

２）参加生徒

日本の高 3：9 名、韓国の高 2・3：10 名

３）参加教員

日本：2 名、韓国：１名

４）スケジュール

1430 先週の振り返り：自己紹介、MBTI、日本・韓国文化についての偏見

1450 今週のテーマの確認：互いの食文化のイメージ

食べたことのある日本食・韓国食、紹介したい日本食・韓国食、食習慣やマナーなど

1550 2 週間の振り返り：授業の感想のまとめ 1610 講義終了

【資料３】夏期特別講座「韓国の生徒と学ぶ日本・韓国・世界」の感想文[55]

A ごんいちわ！

ほんとうによいじかんでした。機会があれば、もう一度したいです。日本について多くのことが分かるようになりました。日本の友達とたくさん話ができて良かったし楽しかった。コロナが治まったら近いうちに日本に行こうと思いました。日本に何回か行って見ましたが、日本の高校生と会話するのは初めてなので、本当に大切な経験でした。今度日本に行ったら、皆さんがおすすめしてくれたラーメン屋さんに行ってみます。皆さんが韓国に関する様々な質問をしてくださって良かったです。

韓国に関する質問があれば気楽に DM してください。また会える日を楽しみにしています。いつか日本か韓国で会えたらいいですね。本当にありがとうございました。

B こんにちは。ホセ高校の生徒の皆さん、二度の出会い本当に楽しかったです。たとえ直接会って対話することはできなかったが色んな話を交わすことができて良かったです.

料理が好きな私としては今度の交流主題が食べ物であることがとても良かったです. 日本料理について知ることができて本当に良かったです。

さくらデンブ教えてくださってありがとうございます。本当に何なのか気になったんです。
私は料理が好きでいろいろ作ってみますが、たまにジブリに出てくる料理を作ってみたりします。教えてもらった通りトトロ弁当を作ってみたいですが韓国ではサクラデンブを売ってないですね。あ、そしてたらこのおいしい作り方も教えてくださってありがとうございます。必ず一緒に食べてみます！

私は辛いものが苦手なので辛くない韓国料理をお勧めしますと、カルビチム、わかめスープ、カンジャンケジャンなどをお勧めします。 比較的辛くない美味しいものですから、もし韓国料理を食べる機会がありましたら覚えてください。

あ、そして私がインスタをしなかったので交流の後に話せなかったんですが、ごめんなさい。 それで感想文を送ってくれて嬉しかったです。 ありがとうございます。
コロナがまだ終わってないので大変ですが、皆さん元気でいてほしいです。

C こんにちは。今度法政高等学校と交流をしながら日本学生たちにも会って、良い経験でした。実は交

[55] 【資料１】に挙げたのは、2 日目の講座を終えてからのもので、4 人の感想文を取り上げた。日本の感想文は【資料３】を参照のこと。傍線部は引用者による。

流する時、私も言いたいことが途中で少しずつあったのに話せなくて残念です。 それでも韓国の友達が質問して日本の学生たちが答える姿を見ながら私も多様な内容を分かるようになって楽しかったです。初めての交流の時、時間を合わせて来なかったので、たくさん待ったことは少しがっかりしました。 でも２次交流の時は待たずに、人数が多くなくて気楽に交流できました。 直接会えばもっと良いですがオンラインなので惜しかったりもします。これから韓国と日本両方とももっと明るい日々があればと思います。 以上で感想文を終わります。 さようなら。

D こんにちは。この前は本当にありがとうございました。ZOOM で話ができてすごく楽しかったです！日本人の友達ができて嬉しかったです。特に、4 チームだった友達みんなありがとうございます！
みなさんがたくさん質問してくださって良かったです。申し訳ないことに、私たちの方が緊張して上手く話せなかった気がします。そして、時間が短く感じられて惜しかったです。

送ってくれた手紙を読みました。私たちがよく読めるようにひらがなとか韓国語でかいてくれた優しさに感動しました。ありがとうございます。

私は日本が大好きです。日本語も上手になりたいし、日本についてもっと知りたいです。日本にとても行きたいです 。もし、行くことになったら必ず連絡します！

韓国では友達と遊ぶ時に”人生４カット”をよく取ります。韓国に来たら行ってみてください。日本のプリクラみたいなものです。

そして、mbti のことなんですけど、mbti によって自分の性向が分かるので、韓国の人々は関心が高いようです。相手の mbti が分かれば、その人が大体どんな人なのかも把握できると思います。 韓国ではすごく流行っているので、mbti の本もあるし、mbti ビールとかもあります。特に”mbti 別反応”を見たらもっと面白いかもしれません！

それでは、いつか会いましょう。いつでもＤＭしてください。コロナに気を付けて、元気でね。

【資料４】合同授業「“満腹”の味」

１.授業のタイトル

「“満腹”の味」

２.授業の紹介文

一学期は「“果物” の味とは何か」「“空腹”の味とは何か」について文学と音楽を組み合わせながら、グループ討議を通じて考えてきました。二学期のテーマは、「“満腹”の味」です。一学期同様に、文学と音楽を組み込んでいきますが、その他にも、徳成女子高校との交流活動を展開します。この交流活動では、宝利先生によるメディア・スタディーズの生徒 9 名も一緒に行います。教室が 19 名になる現実の意味でも、「“満腹”」を味わえますね。この交流活動は、10 月 3 日までに 3 回にわたって行う予定です。

第１回の今日は「夏の思い出」を韓国の生徒と一緒に話します。韓国について知っていること、日本について知ってほしいことを頭の中で準備してください。

３．１日目の授業の進め方

0）テーマ

「夏の思い出」

1）日にち

2022年9月5日1120-1230

2）参加生徒

日本の高3：19名（日本側の男子：７名、女子：12名）、韓国の高2・3：10名

3）参加教員

日本：2名、韓国：1名

4）スケジュール

1100　日本側マルチC集合。有線のイヤホンを持参。

1110　生徒は1人1台のパソコンでZOOMに入り、使い方のレクチャー。

1120　全体で授業の進め方と張の紹介（韓国側に必要であれば、宝利・林も）。

1125　ブレイクアウトルームでグループごとに自己紹介とテーマ紹介。

日本側は1グループ6名ずつ、韓国側は1～2名に分ける。

＊教員と男子を１グループに１名で割りふりたいので、共同ホストに宝利を指定してください。

グループでは、１）自己紹介（名前、韓国について知っていること、みんなへの一言）

２）司会進行役を決める

３）テーマ紹介（夏の思い出）

４）Ｑ＆Ａ（思い出の場所、ごはんなどでテーマに広がりを作る）

1220　再び全体で、今日の振り返りと次回20日の予定確認。

1230　授業終了

４．２日目の授業の進め方

0）テーマ

「“満腹”の東京、“満腹”のソウル」

1）日にち

2022年9月20日1120-1230

2）参加生徒

日本の高3：19名（日本側の男子：７名、女子：12名）、韓国の高2・3：10名

3）参加教員

日本：2名、韓国：1名

4）スケジュール

1040　日本側マルチA集合。有線のイヤホンを持参。

1045　男女別に「“満腹”の東京」プランを準備。

1110　パソコンでZOOMに入り、オンライン授業の準備。

1120　全体で今日の授業の進め方について説明。

1125　韓国・日本の生徒に紹介したい「ごはん」あてゲーム。

→林、宝利、張でそれぞれ「紹介したい「ごはん」」を事前に考え、その名前を生徒に言わず、生徒たちからの質問にYES/NOだけで答え、生徒が「ごはん」の名前をあてるというゲームを実施。

1135　日本側1「“満腹”の東京」について発表。

1145　韓国側「“満腹”のソウル」について発表。

1155　日本側2「“満腹”の東京」について発表。

1205　Q&A（それぞれの発表について聴きたいことなど）

1215　全体で交流活動の振り返り。

1230　授業終了

【資料５】合同授業「“満腹”の味」の感想文

A まず韓国の授業で日本語という科目があることを詳しく知らなかったのですごく驚きました。日本の大学のように第二外国語を選択する形で大学で日本語を学ぶ生徒もいると思ってたので、高校生の時から普通の日本人と会話できるというのがすごいなと感じました。あとは韓国の生徒さんたちは圧倒的に人数が少なくてたくさんの日本人と交流しているのにすごく堂々と話していて、それもすごいなと思いました。日本語の発音は韓国語と似ていて他の国に比べて単純だから韓国人は覚えやすいという話を聞いたことがあります。ほんとに生徒さんたちみんな発音が上手で、反対にわたしは韓国語がすごく早口に聞こえて発音も複雑でまったく聞き取れませんでした。でもやはり韓国語にはない発音を習得するのはとても難しいのだなとわかりました。生徒さんたちみんな“ありがとうございます”が“ありがとうごじゃいます”になっていたのがすごくかわいかったです。調べてみると韓国語にはザ行に当たる音がないのだそうです。あとは韓国人のインフルエンサーの方で“つ”が言えなくて“ちゅ”になっている方がいました。それもザ行と同じで“つ”に当たる音がないのに充分意味が伝わるしみんな流暢なので驚きました。

あとはやはり日本の文化、特にアニメやドラマは韓国でも流行しているということが改めてわかりました。みんなすごく詳しくてわたしたちのクラスでもKpopや韓国料理が流行しているようにほんとに互いが互いの文化に興味を持っているのがすごくいいなと思いました。あとはディズニーランドがないことだったりロッテワールドのことだったり交流してみないと詳しく知れないことがたくさん知れたのですごくいい経験になりました。

次回は韓国人の方にみんなで日本語や日本にまつわることをもう少し教えてあげたりしてみたいなと思いました。どんなことに興味があって、どんなことが日本人のわたしたちに聞いてみないと分からないかというのが気になりました。あとは韓国や日本の映画やアニメなども一緒に見てみたりしたいです。

B 私は韓国ドラマや韓国のアイドルが好きなので、この韓国人の皆さんと交流できる授業をとても楽しみにしていました。オンラインで英会話をやっていたことがあるので、ズームで外国人と話したことはありますが、韓国人の方とは初めてでした。韓国では日本よりもはるかに教育に熱心で、英語もペラペ

ラな人が多いイメージだったので、私の英語が伝わるかすごく不安でした。だけど、韓国の生徒たちは英語ではなく、日本語で話してくれたので、すごくびっくりしました。日本語は世界の言語の中でも特に難しいと言われているし、韓国には日本の「つ」やザ行の発音がないようなので、とても難しい言語だと思います。それなのに一生懸命話してくれて、ものすごく感動しました。韓国の生徒たちは頑張って日本語を話してくれたのに、私たちはあまり話せなくて申し訳ないです。あと２回しかありませんが、勉強しようと思います。

また、日本の食べ物やスパイファミリーというアニメを知っていてくれていたり、話していて日本が好きなんだなということが分かって、とても嬉しくなりました。日本語を使う機会なんてめったにないと思うのに、あんなに上手に日本語を話してくれるのは、日本が好きじゃないと成り立たないと思います。やっぱり興味のあるものは上達しやすいのかなと思いました。大嫌いな数学もまずは好きになる努力をしてみようかなと思いました。

今回は「食」がテーマでしたが、やっぱり近い国でも全然違うんだなと分かりました。日本では辛いものを日常的に食べる習慣がありませんが、韓国では毎日当たり前のように食べるみたいですね。辛いものが苦手な私にとってはちょっとつらいですが、韓国の食べ物は美味しいと有名なのでぜひ挑戦してみたいです。高校を卒業したら、友達と韓国に旅行に行くつもりなので、ぜひおすすめを聞きたいです。

C 自分が普段使っている言語と違う言葉を話すとき積極的に話すということや、わかり合うためには、相手の文化などを尊重することが大切だと学びました。

わたしは必修選択授業で、ネイティブの先生と話す機会があるけれど、英語が聞き取れなかったり、自分がうまく伝えることが出来ないときは、日本語を交えて話してしまいます。私たちは普段、英語を話す先生と話すとき、日本語は少しくらいわかるだろうと思って日本語を使ってしまうけれど、そうすることによって、自分がうまく話せないことを棚に上げて、相手にだけ言語の壁というものを押し付けてしまっているように思いました。それに比べて徳成高校の生徒は、うまく日本語が出てこなかったりしても、違う言葉で伝えようとしてくれたり、身振り手振りを交えて私たちがわかるように話してくれました。外国語を話す上で大切なのは、どれだけ流暢に話すことができるかではなく、伝えようとする態度だと学びました。今回徳成高校の生徒が、一生懸命日本語でコミュニケーションを取ろうとしてくれているのを見て、わたしは今韓国語の勉強を中断してしまっているところなので、自分も韓国語を話せるようになって、韓国語でコミュニケーションを取れるようになりたいと思いました。

また、日本の文化に対しても興味をもってくれていて、日本のことを好きでいてくれているのかなと思い嬉しくなりました。反対に、私たちが韓国について質問した時には共感してくれたり、たくさん答えてくれました。今までは韓国は反日の人が多く、日本の文化を嫌いな人もいるのではないかという偏見も持っていました。けれど、今回の授業を通じて、相手の文化を尊重することによって歩み寄ることができるのだと学びました。普段は意識しないけれど、やはり自分の国の文化は無意識のうちに大切にしているものだし、相手の国の文化に対して、興味を持ったり尊重したりすることによって分かり合えるのではないかと思いました。

今回はいきなりのことだったので、緊張してうまく話せなかったり、後になって質問したいことが出てきたので、次は今回話せなかった人とも交流してみたいと思いました。

D 韓国の学生と交流するというとても貴重な体験を通して、様々なことを学ぶことが出来た。まずはじめに気づいたのは、女子の髪型が日本はほぼみんな前髪があり、逆に韓国は前髪がないことだ。国によって個性が出ていて面白いと思った。どこに住んでいる人でも、自分の国がすべての基準になるから、外国の文化は新鮮に感じるのだと思った。韓国の学生も、日本の学生の前髪率の高さには驚いたと思う。自分たちが英語で海外の方と話す体験はやったことがあるが、日本語で話すのは初めてで新鮮だった。やっぱり向こうが自分たちの言語に合わせてくれたり、日本の文化に興味を持ってくれたりすると、自分の国が褒められているようで嬉しかった。英語で話すのは難しくていつも苦労するが、日本語でも、わかりすい言葉を選んだり、ゆっくりと話すのを意識するのは意外と難しいことに気がついた。また、私たちが普段話している言葉は、かなり崩れた形で、(例えば、「それな」など)そういうところまで理解するには、その国に行って長期間そこで生活しないと難しいと思った。特に日本語は、ひらがな、カタカナ、漢字と 3 種類あったり、1 人称でさえ英語のＩ（アイ）に比べて本当に多くの種類があるので、日本人以外が完璧に使うのはとても難しそうだと改めて思った。逆に、私たちもお手本になるような日本語は普段話していないので、多少言葉がおかしくても伝われば良いと思った。自分たちが外国語を学ぶ上でも、こんなの外国人は使ったことがないと言われるような言葉を覚えるよりも、多少文法がおかしくても相手には伝わるような対話の方法を覚えた方が実践では役に立つと思った。

今回、韓国の学生が日本の文化などに興味を持ってくれてとてもうれしかったので、次は私たちが気になる韓国の文化や流行などを多く聞きたいと思った。また、大学の第二言語などで、韓国語を学習するのは難しいかどうか聞いてみたいと思った。

【資料６】三学期講座「日本で出会う韓国」に関するミーティング

１）日にち

2022 年 12 月 27 日 1200～1600

２）場所

徳成女子高等学校（韓国）

３）内容

a 給食体験

b 学校見学

c2022 年度三学期講座検討

d2023 年度韓国研修検討

４）報告事項等

a 給食体験

・ 教員用給食室にて給食。

- 本日のメニューはビビンパ。前日はハンバーグとのこと。
- 韓国の高校での給食は2000年度より開始。
- 無償給食は2019年度に高3から始まり、2021年度に全学年で無償化。
- 無給で、教員も生徒と同じものを食べる。
- 生徒用の給食室は高校2年生棟の2階に。

b学校見学

- 徳成女子高等学校は、各学年で分かれており、真ん中が高校1年生棟で、向かって左が3年生棟、右が1年生棟となっている。
- 教員室は各学年棟に分かれており、主任と9クラスの担任からなる。
- 担任を持たない教員と講師は、高校2年生棟の教員室に。
- 階段ではなくスロープがあるのは韓国でもめずらしい作りとのこと。
- 全学年が入ることのできる講堂がなく、入学式等の式典は体育も行うことのできる視聴覚室で。
- 徳成女子高校の1学級当たりの生徒数は22、23人。2年生から文系と理系に分けられ、文系は1学級24人前後、理系は18〜20人程度。9クラス中、はじめの6クラスが文系で、あとの3クラスが理系。
- 放課後のクラブ活動は、水曜日の週1回で、一年限りで解散する。
- ただし、残りの放課後は自習室で22時まで生徒は各自勉学に打ち込む。教員は月に2回ほど監督に当たる。

c2022年度三学期講座検討

- 1月18日　「日本で出会う韓国」の目的確認。

  張日榮の紹介。

  林・宝利・張から生徒たちへの講義（各15分程度）。

  目的は、韓国の文化と歴史に着目することで、生徒が日本の中の見えざる韓国に目を向ける経験を作ること。

  林は「『パチンコ』から見える韓国と日本」として、ドラマから見えるそれぞれの社会の特徴について講義。

  宝利は「日本のウトロ地区における韓国」として、日本の中の見えざる韓国の歴史について講義。

  張は「知っておくと役に立つ日韓関係」として、ご自身の体験から感じてきた韓国と日本の交流について講義。

  講義後、3名×4つのグループに分かれる。

  それぞれのグループで、20日に訪れる東京都の自治体で韓国との国際交流を担当する職員への質問を考える。

  林・宝利は2つのグループを担当。
- 1月20日　午後1：上記の東京都自治体へのインタビュー

林、宝利で上の４つから訪問可能な自治体１つずつ

日本と韓国の交流の歴史を知る（話す、聞く）

午後２：コリアンタウン（新大久保）での文化探索

日本の中の韓国の文化を知る（食べる、見る）

・ 2 月 15 日　張に 4 つのグループが PPT を用いて発表（20 分）

自治体へのインタビューでわかったこと：6 分

コリアンタウンで発見したこと：6 分

まとめ：3 分

質疑：5 分

張の講評

d2023 年度韓国研修検討

・ 2024 年 3 月の木金土日（3 泊 4 日予定）

・ スケジュール

木：昼、成田仁川へ。ホテルへ移動。韓国の夕食体験。

金：荷物を持参し、徳成女子高校で学校体験。生徒宅へホームステイ。

土：生徒と共にソウルの街歩き。学校集合、学校解散してホテルへ。

日：朝、仁川成田で帰国。

・ 航空券、ホテル宿泊費を決める。現地で必要となる食事代・移動費は生徒。

＊張日榮氏（徳成女子高等学校）、梅田有希子氏（法政中高）、宝利彩夏氏（法政中高）、宮沢真希子氏（法政中高）より授業実践を含め、本研究に有益なご指摘をいただいた。心より感謝申し上げます。

共同研究者

（代表）　林　圭介

宮沢真希子